

JAPRS

JAN.2025 No.1
新春号

目 次

会長年頭挨拶	1
2024年JAPRS企業説明会報告	2
令和6年度通常総会・懇親会について	4
OTOTEN 2024 JAPRSセミナー 実施報告	6
第23回スタジオ見学会「山麓丸スタジオ」	8
JAPRSミッドサイズスピーカー試聴会	12
第23回JAPRS認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告	14
2024年JAPRSレコーディングセミナー～スタジオワーク編～	15
「AES+JAPRS+Dolby」共同勉強会実施報告	17
第24回スタジオ見学会「角川大映スタジオ」	19
第21回JAPRS認定「Pro Tools技術認定試験」実施報告	25
第2回JAPRS交流会実施報告	26
「第34回JAPRSゴルフコンペ」レポート	27
Inter BEE 2024賛助会員社ブースツアーレポート	28
2024年JAPRS新人エンジニア育成研修会 実施報告	30
ユニバーサル ミュージック Dolby Atmos納品仕様説明会&Augusta Studio 試聴会	33
第30回日本プロ音楽録音賞の開催と授賞式レポート	36
日本プロ音楽録音賞 第30回記念式典	38
第30回日本プロ音楽録音賞 受賞エンジニア&作品紹介	41
第30回日本プロ音楽録音賞 審査委員講評	54
「音の日2024」	65
会員動向	66
サービス産業動態統計調査ご協力をお願い	68

会長年頭挨拶

(一社) 日本音楽スタジオ協会
会長 高橋 邦明



明けましておめでとうございます。日本音楽スタジオ協会を代表し、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

昨年は1月の能登半島地震、9月の能登豪雨のみならず、夏の酷暑や世界的な気候変動で大変な災害が起きた一年でした。被災された皆様には一日も早い復興と平穏な日々が戻られますよう心よりお祈り申し上げます。また、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルとパレスチナの紛争を含め世界には戦争が絶え間なくあります。作家の村上春樹さんがラジオ番組で次のようなことをおっしゃられていました。

「音楽に戦争をやめさせるだけの力があるのか？ 残念ながら音楽にはそんな力はないと思います。でも聴く人に『戦争をやめさせなくちゃいけない』という気持ちを起こさせる力があります」

世界情勢が一刻も早く収束するよう願わずにはられません。

昨年12月6日「音の日」に「第10回 ReC♪ST 学生の制作する音楽録音作品コンテスト表彰式」と「第30回日本プロ音楽録音賞授賞式」を開催致しました。それぞれ第10回、第30回の節目を迎える素晴らしい式典になったかと思います。今回は会場の神田スクエアホール天井設置のスピーカーをハイトチャンネルとして使用し、両式典ともイマーシブ受賞作品のご紹介をよりイメージに近付けるため5.0.4chで再生致しました。ステレオ作品を含め、アマチュアのエンジニアの方も非常に素晴らしい拘りの音創りをされており、感激致しました。これからのエンジニアリングの未来に明るい展望が見えております。一方、日本プロ音楽録音賞の応募作品、授賞作品につきましても、若手エンジニアの台頭が目覚ましく、将来にわたって音楽産業の発展に大変期待が持てる「音の日」に相応しい一日となりました。

日本プロ野球名球会顧問の王貞治さんが現役のプロ野球選手に対して、このようなメッセージを送られていましたので、ご紹介させていただきます。

「『見に行きたい』と思う野球をやってほしい。打球音はテレビで聞く音とは違う。あの音で野球場へ足を運んでくれる。快音を出してお客さんを引き込んでほしい。『野球場で見なきゃ』という野球をやってほしい。」

あの王貞治さんが音に対して言及されていることは、驚きでもあり、大変うれしく感じました。このメッセージをスタジオ業界に置き換えますと、

「あのレコーディングスタジオで録音した音でユーザーは音楽に感動している。」

「『やっぱりレコーディングスタジオで録音しなきゃ』という音、音楽を創ってほしい。」

ということでしょうか。「いい音は感動する！」ということ是不変でございます。あらためまして、今年度も日本音楽スタジオ協会として、レコーディングスタジオの訴求度を高めて参りたいと存じます。

本年度も各業界との連携を深めながら、日本音楽スタジオ協会活動を進めて参りますので、更なるご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い致します。

2024 年 JAPRS 企業説明会報告

2024 年 5 月 25 日（土）東放学園音響専門学校において、2024 年 JAPRS 企業説明会を開催しました。

専門学校 20 校から 150 名の参加の中、下記の通り 10 社による企業説明が行われました。

企 業 名	出 席 者 名 (敬称略)	
(株) 青葉台スタジオ	代表取締役社長	高橋 孝典
(株) EMP	取締役	能瀬 秀二
	制作技術部	飯塚 明
	〃	光井 里美
	〃	小林 有沙
(株) キング関口台スタジオ	取締役	高橋 邦明
	渉外グループ長	井上 慎太郎
(株) サウンドインスタジオ	スタジオ映像制作グループ部長	河野 洋一
	アシスタントエンジニア	植田 築
(株) サウンド・シティ	Music Div. 次長	中山 太陽
	Visual Div. 次長	坪田 雄介
ビクターエンタテインメント (株)	ビクタースタジオ長	石野 憲一
	エンジニアグループ、FLAIR ゼネラルマネージャー	山田 幹朗
	営業G チーフ	粕谷 尚平
	テクニカルエンジニア	池谷 光平
日本コロムビア (株)	スタジオ技術部・部長	冬木 真吾
	〃 マスタリングエンジニア	富岡 真紀
(株) ミキサーズラボ	専務取締役	中村 隆一
	営業	紋田 夏実
ソリッドステートロジックジャパン (株)	代表取締役	松井 憲佑
(株) メディア・インテグレーション	取締役	岡田 詞朗

※ 肩書は開催当時のものです。



企業説明会受付



説明会の様子



(株) 青葉台スタジオ



(株) EMP



(株) キング関口台スタジオ



(株) サウンドインスタジオ



(株) サウンド・シティ



ビクターエンタテインメント (株)



日本コロムビア (株)



(株) ミキサーズラボ



ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン (株)



(株) メディア・インテグレーション



フリー質問コーナー

令和6年度通常総会、懇親会レポート

<通常総会>

令和6年6月13日(木)、バトール東京3F「ホールB」において対面を主としたオンラインを併用しての令和6年度通常総会開催し、平成5年度の事業報告書(案)、収支決算報告書(案)、令和6年度事業計画書(案)及び収支予算書(案)、役員全員任期満了による新役員の選出に関し正会員に諮り、全ての議案が賛成多数により承認されました。

はじめに、内藤事務局長が定足数の確認を行い、書面表決者を含む30名の出席数を確認(定足数)、総会の開会を宣言。

続いて高田会長が議長に当たり、議事録署名人として高橋副会長、金井監事の両名が選出されました。

次に内藤事務局長より第1号議案「令和5年度事業報告書(案)」、「収支決算報告書(案)」について説明が行われ、審議の結果、異議なく全員一致で承認されました。

続いて内藤事務局長より第2号議案「令和6年度事業計画書(案)」、そして「収支予算書(案)」について説明が行われ、審議の結果賛成多数で承認されました。

次に議長より第3号議案「役員全員任期満了による新役員の選出について経過が説明され、同様に全員一致で承認された後、最後に議長である高田会長が閉会を宣言し総会を終了いたしました。

※ 通常総会後に開催された第35回理事会にて、新会長・新役員が選出されました。

<懇親会>

通常総会終了後、18:30よりバトール東京1F「メイン会場」において、正会員、準会員、賛助会員及び招待者を含む90名が集い、総務委員会の萩原一哉氏(稲葉建設(株))の司会進行により懇親会が開催されました。

最初に通常総会後に開催された理事会において、次の会長へバトンを引き継ぐこととなった高田英男前会長より、今までのご支援に対する御礼が述べられた後に、新会長に選出された(株)キング関口台スタジオの高橋邦明氏が高田前会長から紹介され壇上へ、それに続いて令和6~7年度の新しい理事・監事が紹介され壇上に揃ったところで、新役員を代表して高橋新会長からの挨拶が述べられました。

続いて、経済産業省 商務情報政策局 コンテンツ産業課(現 商務・サービスグループ 文化創造産業課) 課長補佐 腰田将也様から来賓代表として挨拶が述べられました。



通常総会開催の様子



司会進行 萩原一哉氏



高橋邦明新会長



高田英男前会長

そして、高橋新会長により乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなりました。

更に歓談が続き中締め時間となり、総務委員会・中村委員長による挨拶が行われ、懇親会も無事に終了となりました。

スタッフとして開宴前より準備にご協力いただいた会員の皆様、ありがとうございました。



新しい理事・監事の紹介



経済産業省
腰田 将也様



高橋新会長 乾杯の発声



中村総務委員長



懇親会の様子

OTOTEN 2024 JAPRS セミナー 実施報告

東京国際フォーラムにて（一社）日本オーディオ協会主催「OTOTEN2024」が6月22～23日に開催されました。

JAPRSでは 会員2社のご協力のもと、6月22日（土）に出展ブース G701 および G407 において下記の通りセミナーを実施しました。

（株）ミキサーズラボ / 11:00～12:00

「日本プロ音楽録音賞 30年の歩み
～その時代に於ける音創りの変遷／受賞作品試聴～」

講師：内沼 映二氏 （株）ミキサーズラボ 会長 / 日本音楽スタジオ協会 名誉会長



セミナー冒頭では、OTOTENの主催である日本オーディオ協会小川 理子会長より挨拶がされ、それに続いてセミナーがスタートしました。

日本プロ音楽録音賞の歴代受賞作品の中から、その時代の録音手法、音創りに影響を与えた作品を時系列で紹介&試聴しながら、録音機材、メディアの変遷を詳細解説を行いました。

展示ブースとしては広い会場ながら多くの人が集まり、興味深く歴代受賞作品の再生に耳を傾けていました。



（一社）日本オーディオ協会
小川 理子会長



講演中の内沼 映二氏



会場の様子

（株）サウンド・シティ / 14:30～15:30

「VTuber 音街ひびき と学ぶ 立体音響」

講師：加納 洋一郎氏 （株）サウンド・シティ イマーシブ Div 部長

立体音響スタジオ「tutumu」を保有するサウンド・シティの公式VTuber「音街ひびき」とMix エンジニア 加納 洋一郎氏により、ステレオ～サラウンド、そして立体音響の違いについて実際に音を聞きながら説明がされ、参加者がその違いを体感している様子が伺えました。



加納 洋一郎氏



「VTuber 音街ひびき」と会場の様子

(一社)日本音楽スタジオ協会 / 16:00 ~ 17:30

「日本プロ音楽録音賞・イマーシブ部門優秀作品のマスター音源再生
“イマーシブサウンドによる音楽制作の魅力を体験”」

講師：高田 英男氏 (株) ミキサーズラボ

日本プロ音楽録音賞イマーシブ部門に応募された作品の中から、是非とも聴いて頂きたいと考える優秀作品を選び、そのミックスマスター音源をスピーカーで再生することで、イマーシブサウンドによる音楽の魅力を体感していただくセミナーを行いました。



高田 英男氏



「イマーシブサウンドによる音楽制作の魅力を体験」会場様子

どのセミナーにおいても興味を持たれた多くの参加者にお集まりいただきました。

セミナー開催にご協力いただきました(株) ミキサーズラボ様、(株) サウンド・シテイ様に感謝申し上げます。

第23回スタジオ見学会「山麓丸スタジオ」

賛助委員会主催 第23回スタジオ見学会「山麓丸スタジオ」が6月27日（木）に下記概要にて開催されました。

- 日時：令和6年6月27日（土）1回目 10：00～ / 2回目 11：45～
会場：株式会社山麓丸 山麓丸スタジオ
内容：Ⅰ. ご挨拶
Ⅱ. スタジオの紹介（スタジオスペック、山麓丸のご紹介）
Ⅲ. Dolby Atmos、Sony 360 Reality Audio 試聴体験
Ⅳ. カuttingスタジオの紹介、内覧

今回の見学会は、イマーシブ・オーディオ専用スタジオとして設立された「山麓丸スタジオ」について、スタジオコンセプト等やイマーシブ・オーディオ作品制作における方針を伺いながらの試聴を行うだけではなく、同スタジオ内に備えられているアナログ盤のカutting。ルームの見学も含まれ、新旧のフォーマットへの対応について伺える興味深い機会となりました。

JAPRS 賛助委員長 岡田氏から開催の挨拶の後、山麓丸スタジオジェネラルマネージャー 中村 義響氏から見学会の流れ、そして会社概要の説明がされました。



山麓丸スタジオ
中村 義響氏

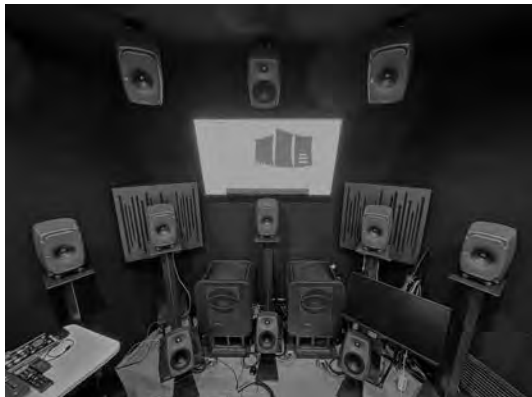
山麓丸スタジオは、「立体音響のプロとして常に最新の技術力、企画力を持ってエンタメ産業に新しいマーケットを作り出すことを目指している」との話を伺い、これからのスタジオ業界にとって大変重要な考え方だと感じました。

山麓丸スタジオは空間オーディオに特化した日本初の音楽スタジオとして2021年6月に設立され、2022年10月にラダプロダクションから、(株)山麓丸として分社化されたとのことです。

現在では、Dolby Atmos、Sony 360 Reality Audio のコンテンツ制作を中心に、それらを広めるための企画・制作、ライブ収録、配信協力までも行っているとのことでした。

そして、山麓丸スタジオのエンジニア 當麻 拓美氏から、スタジオについての説明がされました。

基本的な構成としては、入口直ぐのマシンラック、そしてその



コントロールルーム前方のスピーカー配置

左隣にあるボーカルブース（ナレーション、ギターダビング等も行っている）、そしてラウンジを進むとコントロールルーム、さらにその奥にCuttingルームとなっています。

マシンラックがコントロールルーム外に設置されているのは、部屋の容積的に中への設置が難しいことと多くのスピーカーで囲まれる環



岡田賛助委員長



山麓丸スタジオ
當麻 拓美氏

境に対して干渉するものを置きたく無かったとの説明がありました。

建築音響工事は（株）若林音響によるもので、機材関係はソニーホームエンタテインメント&サウンド、ジェネレックジャパン、シンタックスジャパン、エムアイセブンジャパン、メディア・インテグレーションの協力を得て設置しているとのことでした。

スピーカー構成としては、Dolby Atmos (9.1.4ch)、360 Reality Audio (5.0.5+3Bch)に対応、スピーカー機種については下記に示す通りです。

L/C/R/Lw/Rw/Ls/Rs/Lss/Rss/Ltf/Rtf/Lts/Rts	⇒ Genelec 8331A
Lb/Cb/Rb/TopCenter/Lts/Rts	⇒ Genelec 8330A
Subwoofer	⇒ Genelec 7360A

メインのI/Oは、MTRXを採用して、ヘッドホンモニターのためにMADI回線を引き込んで、RME MADI XTを使用しているとのこと、モニターコントロールについてはDAD MOM-Monitor Operating Moduleで行い、フォーマット切り換え等を行っているとのことでした。

フェーダーコントロールは、Avid S1を使用しているとのことでした。

ここまでの説明がされた後、イマーシブ・オーディオの試聴とカッティングルームの見学に分かれて、見学会は進行了ました。

山麓丸スタジオに併設されたカッティングルーム「CISCO Mastering&Cutting」には、カッティングマシン「Neumann VMS70」が設置されており、ラッカー盤へと音を刻み込む流れについて金森氏から説明がされました。

ここでの作業は、マスタリング済みの音源のカッティング、マスタリング含めたカッティングの両方があるとのことですが、マスタリングがされているとは言ってもそのままカッティングをするのは難しく、いずれにしても何らかの処理をしてカッティングを行うとのことでした。

また、音を刻むカッターヘッドに対して過大な入力が入ると飛んで（焼き切れる）しまうため、ディエッサーの重要性についても話されていました。ちなみにカッターヘッドを直せる人がようやく世界で二人になったと言う話もされていました。



(株) ギャラクシー
金森 達也氏

Chester Beatty氏からはスタジオの施工等に関する説明がされ、振動の影響を受けるカッティングマシンに対して、スピーカーからの振動が伝わらないように、カッティングマシンの下部に処理が施されているとのことでした。

その後、アナログ・カッティングマシンについては見慣れない参加者多かったため、様々な質問がされていました。



Avid S1 と DAD MOM-Monitor



カッティングマシン「Neumann VMS70」



HIGH FREQUENCY
LIMITER
(現在は別のディエッサーを
使用しているとのこと)

そして再びイマーシブ・オーディオのコントロールへ移動して、Dolby Atmos、360 Reality Audio の試聴タイムとなりました。(試聴の際は同スタジオのエンジニア 鳥越 裕史氏にサポートをいただきました。)

ここではエンジニアの當麻氏が昨年 of 日本プロ音楽録音賞 Immersive 部門で最優秀賞を取った作品の Dolby Atmos と 360 Reality Audio の比較試聴の他、360 Reality Audio でミックスするために様々な工夫がされたマイクセッティングによりホール収録された作品など、貴重なイマーシブ体験が出来ました。

エンジニア當麻氏の拘り考え方も大変興味深く、参加者から多くの質問がされていました。

今回貴重な見学会の開催にご協力いただきました、山麓丸スタジオの皆様には感謝申し上げます。



Chester Beatty 氏



山麓丸スタジオ
鳥越 裕史氏

JAPRS 第 23 回スタジオ見学会～「山麓丸スタジオ」～見学レポート

日本音響エンジニアリング 崎山 安洋

ソニーより「360Reality Audio」のオブジェクトベースの立体音響技術が提供され、その後この技術を使った3Dコンテンツ制作に特化した「山麓丸スタジオ」が設立された。

イマーシブの新技术であったこととスタジオ名称のサンロクマルが漢字表記であったこともあり記憶に残り、当時360RAの音を聴かせていただきたいなと思っていました。今回JAPRSスタジオ見学会の案内があり少人数の募集であったが早々申込んだ。今回、見学内容をレポートする。

見学は一回の見学で、参加者の半分はイマーシブスタジオから、もう半分はカッティングルームからの見学で、途中入替で見学が進行した。見学は2室を入替、時間的にも2部で開催された。

見学当日地下鉄表参道駅から青山通りを抜けて向かったが交通量の多い大通りから小路を入った閑静な街にあった。ビル1Fのエントランスを入ると、手前に「360RA イマーシブ音楽スタジオ」、その奥に「マスタリング・カッティングルーム」が配置されている。我々は最初「山麓丸スタジオ」、次にカッティングルームを見せていただいた。

室内に入ると、360RAのレギュレーションに沿って、GENELEC8331A(一部8330A)が上層5本、耳の高さ5本、下層3本、下層スピーカーの間にサブウーファー7360Aの



山麓丸スタジオ 説明の様子

2本が配置。

コンパクトな空間であるが、スピーカーが整然と配置され、上層スピーカーと中層スピーカーとの間にディスプレイが配置され、正面壁方向は、かなりの密度で配置されている。

それ以外の機材はコンパクトにおかれ、特に下層のスピーカーからの音が機材等に遮られないような配置計画となっている。この結果、すべての音がストレートに聴こえる環境である。

デモは、室内で席を交代しながら、同じ作品を 360RA と Dolby Atmos に Mix したもののや、作品を替えて再生し、當麻氏に説明をいただいた。

これまで、イマーシブ・オーディオ対応スタジオも造ってきたが、山麓丸スタジオでは、同じ作品を Sony 360RA と Dolby Atmos の両方のフォーマットで聴かせていただいた。これは、なかなか無い機会でした。360RA と Dolby Atmos の両方対応のポスプロでも、同じ作品を聴ける機会はなかなか無かった。音楽作品を聴かせていただいた結果、イマーシブ音楽作品の再生においては、立体音響を特に意識せず、いつの間にか立体音響の世界に入っており、気づいた時には「音楽に聴き入っていたな」といった印象であった。Atmos は広い劇場で多数の客に対し、同じような方向感を聴かせる目的から発生しているが、大空間での方向移動の表現は、こちらかなと思えた。

見学室を替え隣室のマスタリングルームに移動。入ってすぐの壁際に、ノイマンのカッティングマシンが、ドーンと置かれてあった。こちらの室の説明は、Chester 氏から説明を受けた。

カッティングについては、独自にいろいろと試され、その経験が現在いかされているとのことであった。スピーカーは、B & W Matrix 801、日本のレコード会社のマスタリングルームでもかつて使われていたスピーカーであった。壁際のラックには、カッティングマシンのアンプ、EQ、COMP などなどが、実装されてあった。

今回、最近の「360RA イマーシブ音楽制作スタジオ」、伝統的技術だが音楽ファンに人気のあるアナログ盤の「マスタリング・カッティングスタジオ」と対照的な2つのスタジオ技術を見せていただき、大変参考になりました。株式会社山麓丸の皆様、有難うございました。



カッティングルーム B & W Matrix 801



入口付近設置されたマシンラックと
Vo ブース



用意されていたヘッドホンモニター各種

ミッドサイズ・スピーカー試聴会

JAPRS 賛助委員会主催によるミッドサイズ・スピーカー試聴会が、6月29日(土)に専門学校 ESP エンタテインメント東京・14号館を会場として開催された。

数年前から計画されていた試聴会でしたが、コロナ禍の影響により長らく延期がされており、ようやく実施されたイベントとなります。

参加企業は、JAPRS 賛助会員社 8社、会員外社 1社の計 9社で、各社出展ブースが 1教室ずつと言う好条件での開催となりました。

参加者は、JAPRS：14名、JAREC：12名、NHK：4名の計 30名で、13時～17時の開催時間帯、各出展ブースともに試聴者が途切れることなく訪れる状況で、会場と参加者のバランスも良く、大変濃く充実した試聴会となりました。

「出展企業 JAPRS 賛助会員 8社、会員外 1社」

ADAM：SONIC Agency Inc.

Amphion：ミックスウェーブ株式会社

Eve Audio、Focal：株式会社メディア・インテグレーション

GENELEC：株式会社ジェネレックジャパン

KS Digital：株式会社スタジオイクイメント

Neumann：ゼンハイザージャパン株式会社

PMC：オタリテック株式会社

JBL：ヒビノインターサウンド株式会社（※ヒビノ株式会社）



ADAM：SONIC Agency Inc.



Amphion：ミックスウェーブ



Eve Audio、Focal：メディア・インテグレーション



GENELEC：ジェネレックジャパン



KS Digital : スタジオイクイブメント



KS Digital : スタジオイクイブメント



PMC : オタリテック



JBL : ヒビノインターサウンド (ヒビノ)



会場入口 受付

ミッドサイズ・スピーカー試聴会の開催に当たり、学校施設をご提供いただきました専門学校 ESP エンタテインメント東京様、そして開催にご協力いただきました出展社の皆様に感謝申し上げます。



専門学校 ESP エンタテインメント東京
14号館

第 23 回 J A P R S 認定「サウンドレコーディング技術認定試験」 実施報告

7月7日(日)、札幌 × 2、仙台 × 2、郡山、新潟、東京 × 9、名古屋 × 4、大阪 × 4、博多の 8 地区 24 ヶ所の団体受験会場に分散して、「第 23 回 JAPRS 認定サウンドレコーディング技術認定試験」が実施されました。

本年度の申請者数は 683 名に対して受験者数は 628 名となりました。

試験内容は例年通り四者択一マークシート方式で、音響の理論／電気音響とスタジオシステム／レコーディング技術と先進技術／音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史などの 4 ジャンルから各 25 問(計 100 問、1000 点満点)が出題されましたが、平均点は 767.1 点という結果になりました。



東京地区会場 (ミュージズ音楽院)



大阪地区会場 (ESP エンタテインメント大阪)

以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

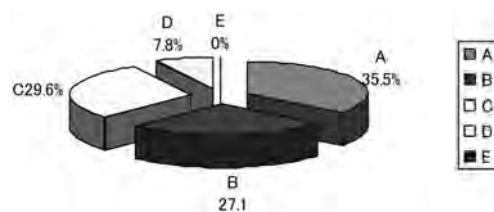
- (1) 受験申請者 683 名 欠席 55 名 受験者 628 名
最低点 220 点 最高点 1000 点 (72 名) 平均点 767.1 点
- (2) 平均点詳細 (各ブロック 250 点満点)
 - I . 音響の理論
正答率 78.6% 平均点 196.5 点
 - II . 電気音響とスタジオシステム
正答率 74.5% 平均点 186.3 点
 - III . レコーディング技術と先進技術
正答率 78.7% 平均点 196.7 点
 - IV . 音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史など
正答率 72.9% 平均点 187.6 点

- (3) 得点別人数

1000 ~ 900	233 名
890 ~ 800	89 名
790 ~ 700	80 名
690 ~ 600	70 名
590 ~ 500	79 名
490 ~ 400	58 名
390 ~ 300	15 名
290 ~ 200	4 名
200 ~	0 名
計	628 名

- (4) ランク別人数

A ランク	1000 ~ 901 点	223 名
B ッ	900 ~ 701 点	170 名
C ッ	700 ~ 451 点	186 名
D ッ	450 ~ 201 点	49 名
E ッ	200 点以下	0 名
計		628 名



2024年 JAPRS レコーディングセミナー ～スタジオワーク編～レポート

専門学校委員会の主催により実施されているこのセミナーは、JAPRS 賛助会員加盟専門学校の2年生以上を対象として、東京地区、大阪地区正会員スタジオおよび名古屋ビジュアルアーツを会場とし、プロのレコーディングスタジオにおけるアシスタントの役割について伝える内容となっています。

今年は、7月13日（土）：大阪地区、7月20日（土）：名古屋地区、7月28日（日）：東京地区での開催となりました。

実施内容

- ①. セミナー使用スタジオについての説明
- ②. 音源データの取り込みについて（取扱い&確認事項など）
- ③. ボーカルダビングのセッティングについて
- ④. ボーカルダビングを想定したセッティングおよび歌詞等の準備について
 - ・ 譜面を追って進行の確認&カウンター書き
 - ・ ボーカルトラックを聴きながら歌詞カードへのカウンター記入
 - ・ ボーカルエディット作業について実演および受講者体験
- ⑤. アシスタントへの質問コーナー
- ⑥. ダビング作業の実践（アコースティックギター）
 - ・ マイクングやアウトボードによるサウンドメイキング
 - ・ 演奏者とのやり取り
- ⑦. エンジニアからの受講者皆様への総括 ～ Q&A

大阪地区会場（7月13日（土）於：スタジオグルーヴ Ast）

参加者：3校11名

エンジニア：中山 佳敬 氏 / ビクタースタジオ

サポートエンジニア：金子 拓人 氏 / スタジオグルーヴ

名古屋地区会場（7月20日（土）於：名古屋ビジュアルアーツ Pixy Studio）

参加者：1校13名

エンジニア：中山 佳敬 氏 / ビクタースタジオ

アシスタントエンジニア：藤田 成哉 氏 / ビクタースタジオ

東京地区会場（7月28日（日）於：ビクタースタジオ 302st）

参加者：9校40名

エンジニア：中山 佳敬 氏 / ビクタースタジオ

アシスタントエンジニア：藤田 成哉 氏 / ビクタースタジオ

タイムスケジュール

大阪会場：スタジオグローヴ Ast
7月13日（土）
1回目 13:00～15:15



ダビングに向けたバランス作成



マイクセッティングについて

名古屋会場：名古屋ビジュアルアーツ
Pixy Studio
7月20日（土）1回目 13:00～15:15

東京会場：ビクタースタジオ 303st
7月28日（日）
1回目 10:00～12:15
2回目 13:00～15:15
3回目 15:30～17:45



ボーカル EDIT 作業



参加学生自身でマイクセッティング～コンソールへの立ち上げ

「AES+JAPRS+Dolby」共同勉強会 “LIVE FILM における 'Dolby Atmos 音響制作”

AES日本支部、JAPRS、Dolby Japan 株式会社との共同で企画した共同勉強会「LIVE FILM における Dolby Atmos 音響制作」を、8月8日（木）に株式会社 IMAGICA エンタテインメントメディアサービス「竹芝メディアスタジオ 1F / 第2試写室」にて開催した。

勉強会は、2024年1月に公開されたライブ映画、「FUKUYAMA MASAHARU LIVE FILM 言霊の幸わう夏 @ NIPPON BUDOKAN 2023」について、音響制作を担当した三浦 瑞生氏（株式会社ミキサーズラボ）、染谷 和孝氏（株式会社ソナ）、嶋田 美穂氏（株式会社ヒューマックスエンタテインメント）に解説いただく内容でした。

今回解説いただいた作品は、日本武道館で行われたコンサートを40台以上のカメラで360°全方位を視覚化した映像と、3D音響フォーマットであるDolby Atmosを駆使した作品となり、福山監督が創造する、究極の“ライブを超えたライブ体験”を映画化したもの。JAPRSとしては、音楽映像制作に関わるための連携作業を知る上でも大変貴重な機会になるとともに、対面での参加者にとっては、竹芝メディアスタジオ 第2試写室での見学試聴会としても貴重な体験となる勉強会となりました。



竹芝メディアスタジオ 第2試写室

会 場： 株式会社 IMAGICA エンタテインメントメディアサービス
「竹芝メディアスタジオ 1F / 第2試写室」

日 時： 2024年8月8日（木）
○1回目 : 13:30 ~ 15:30
○2回目 : 16:00 ~ 18:00 *2回目のみオンライン配信（Zoom）

作 品： FUKUYAMA MASAHARU LIVE FILM 言霊の幸（さき）わう夏
@ NIPPON BUDOKAN 2023

<http://www.shochiku.co.jp/cinema/lineup/fukuyamamasaharu-livefilm/>

勉強会のトピックスとしては以下の内容となりました。

- (1) チームの構築と作業メリット
- (2) 新しいワークフローの構築
- (3) 収録プランの検討、オーディエンスマイクの重要性
- (4) Cinema と Home の融合
- (5) モニター環境の重要性
- (6) コストを抑えるための工夫
- (7) Cinema Mix と Atmos Master の作成
- (8) Cinema 環境でのモニター差異
- (9) Cinema から Home へ



この勉強会の様子は2025年2月までYouTubeにて視聴が可能ですので、QRコードからアクセスし是非ご覧いただければと思います。(アーカイブ動画には映画本編上映部分は含まれておりません。)



また、勉強会終了後に浜松町駅近くの会場にて、こちらも AES+JAPRS+Dolby 共同のソーシャルアワー（懇親会）を開催いたしました。

50名を超える参加者があり、幅広い交流の場とすることが出来ました。



ソーシャルアワー（懇親会）の様子

今後も団体の枠を超えた勉強会開催も視野に入れて進めて行きたいと思います。

第24回スタジオ見学会「角川大映スタジオ」

賛助委員会主催 第24回スタジオ見学会「角川大映スタジオ」が8月26日（月）に下記概要にて開催されました。

- 日時： 令和6年8月26日（月）
会場： 株式会社 角川大映スタジオ ダビングステージ
内容：
I. ご挨拶 竹田 直樹氏 / 株式会社角川大映スタジオ
II. スタジオ紹介・解説および試聴等
山口 慎太郎氏（株式会社角川大映スタジオ）
崎山 安洋氏、宮崎 雄一氏
（日本音響エンジニアリング株式会社）
前田 洋介氏
（株式会社メディア・インテグレーション）



岡田賛助委員長

岡田賛助委員長による見学会開催の挨拶の後、(株)角川大映スタジオの竹田 直樹氏から、事業紹介がされました。

このスタジオは撮影所としてはかなり古く大映時代からあるが、角川グループとなったのは2002年からで、今年で22年目を迎えられたとのこと。現在は7つのステージを所有、8割はCM作品で年間400本、残り2割がOTTをはじめとした配信系、角川の映画製作を行っているとのことでした。

2011年にステージGが出来て、そのタイミングでポストプロ棟が出来てポストプロ機能を持ち、その時に制作会社としての機能も持ったとのことでした。

映像制作の流れで、角川大映スタジオは「映像制作基地」として、スタッフルーム、衣装合わせ会場、撮影スタジオレンタル、照明レンタル等も対応しており、大きな特徴として美術セット製作までもが自社で出来てしまうとのことでした。そうすることで、柔軟な対応が可能となるとのこと。そしてポストプロダクション事業（2011年から）として、編集室、サウンド編集室、MA、Foley、Dubbing、Grading、試写室の機能を備えており、

一貫した映像制作が可能な環境を実現しているとのことでした。（撮影所はCM中心、ポストプロダクションは映画、ドラマが中心とのことでした。）

4月から始めたバーチャルプロダクション事業では、ソニー製15m×5mのLEDパネルをCスタジオに設置して、バーチャルプロダクション専用のスタジオとして運用し、「IN-CAMERA VFX」手法を用いたコンテンツ制作に対応しているとのこと。「想像力を超える創造力」というコピーが印象的でした。

また、「映画のまち 調布」への地域貢献をしており、「調布シネマフェスティバル」や「高校生フィルムコンテスト」にも取り組んでいるとのことでした。



(株)角川大映スタジオ
竹田 直樹氏



角川大映スタジオの事業概要説明

続いて、株式会社角川大映スタジオの山口 慎太郎氏から、ダビングステージの改修コンセプトの説明がされました。

2011年から撮影所系のポストプロダクションとして、映画のファイナルミックスが行えるダビングステージとして、劇場用ミックスを制作するのに適した天井高や適度な広さがあることから評価をいただいております、改修するまでの13年間で338本の映画作品のミックスを行って来た実績があるとのことでした。

改修前はAMS NEVE社DFC Geminiを中心としたシステムを使用して来たが、今回の改修にあたって様々な問題点を解決すべく計画を進められたとのことでした。

Dolby Atmos化すると言うことで、イマーシブオーディオに最適化した、解像度が高く、直観的で反応が良く、音の判断がしやすい部屋を目指し、長めであった残響時間についても、吸音を増やしてデッドな音場を目指したとのことでした。

解像度の高い音響を目指し過ぎることで、音の勢いなど以前の良さを失わないように、最終段ではD/Aを行いアンプにはアナログ信号で入れることとしたそうです。

フロントのスピーカーおよびアンプについては、改修以前のものを使用しているようですが、ケーブル類は引き直し、スピーカーケーブルはベルデン社製のものを採用するなど、音の出口まで拘った仕様としているとのことでした。

内装については、一目で日本のダビングステージと分かるような“和モダンで明るいダビングステージ”をコンセプトとしたそうで、壁には組子細工等が取り入れられていました。

そしてプロジェクターを使用する場合は反射を抑えるために暗い色を採用するところを、白系の明るいファブリックを使用していますが、それでも前方ワイドスピーカーより前方の視線に入る床・天井・壁は黒い色とされていました。

照明についても照度が高いLEDを採用し、メリハリのある明るさを目指したそうです。

家具類についても卓S6のフレーム、2列目のディレクターテーブル、後方のデスクなど、明るい色の木材面を広くしているとのことでした。

山口氏の改修コンセプト説明が終わったところで、トレーラーの視聴が行われ、その後に建築音響に携われた日本音響エンジニアリング株式会社の崎山 安洋氏、宮崎 雄一氏から音響建築関係の改修概要が説明されました。

最初にポストプロ棟竣工当時の話がされましたが、ポストプロ棟は2011年8月に竣工、実際に稼働が始まったのは同年11月とのことでした、2010年



(株) 角川大映スタジオ
山口 慎太郎氏



改装後ダビングステージ



日本音響エンジニアリング (株)
崎山 安洋氏 宮崎 雄一氏

から計画、そして2011年の頭から現場に入られたとのこと。

2011年と言えば3月に東日本大震災が発生した年で、計画停電の中での工事進行や吸音材ロックウールが品薄になった等、当時の大変な状況も説明がされました。

また、このポストプロ棟において、通常1階等に配置されるFoleyが4階に設置せざるを得ない状況での対応策についても説明がされた。4階に設置するということは、他のスタジオ等との遮音・防振を考えると浮構造にする必要があるのだが、固定床の方が音にとっては有利であること。

そこで、通常の浮構造より2倍のコンクリート厚にしたり、防振ゴムにも配慮することによって、固定床に近い音が録れるようにしたとのことでした。

そして改装前のダビングステージは、サラウンドスピーカー間に日本音響エンジニアリング社製の柱状拡散体（AGS）が設置され、サラウンド感の繋がりが良くなるように設計されており、AGSの間のファブリック仕上げの壁は傾斜が付けられていてフラッター防止、そして内部には低域吸音の仕組みが施されていたとのことですが、改修後は有効スペースを広く取るために壁の傾斜は無くしており、改修前に設置されていた柱状拡散体については、全て壁内に再設置されているとのこと。

今回、正面バッフル面はスクリーンの張替え以外は殆ど触っていないとのことですが、スクリーンの選定については、日本音響エンジニアリング（株）のサウンドラボに1ch分のスピーカーを組み上げて、スクリーン越しの試聴をして行っているとのこと。

照明については、角川大映スタジオ（株）の山口氏からの説明にもあったように、明るくしたいとのことでしたが、天井の高さがあるために選定には苦労されたそうです。特にコンソールを照らす照明については、それ以外を照らさないようにナローな器具を選択する必要があったのですが、集光レンズを使用してそれを実現したとのことですが、照明演



改修前のダビングステージ



改修後ダビングステージ壁面



スクリーン背後のフロントLCRスピーカー



スクリーン越しのスピーカー試聴

出等については細かく打合せがなされたとのことでした。

スピーカーは、正面 LCR、左右壁面7個ずつ、後壁6個、天井7個×2列、正面 LFE×2個、天井 LFE×4個が設置されています。(フロント「JBL5742」×3、前面 LFE「JBL4642A」×2、サラウンドスピーカー「JBL9310」×28と「JBL AM521200」(頭上)×6、天井 LFE「JBL4645C」×4。)

ここでの施工においては、天井が高いことから3階建ての足場が組まれたとのことですが、足場を外した後の再調整ややり直しが困難なため、足場のあるうちに十分にスピーカーを鳴らして、部分部分での音場確認そして吸音材調整がされ、特に天井のサブウーハーでのビリツキ等が発生しないように注意が払われたとのことでした。

そして最後に(株)メディア・インテグレーション 前田 洋介氏から、5.1ch から Dolby Atmos へと改修したシステム関係のポイントについて説明がされました。

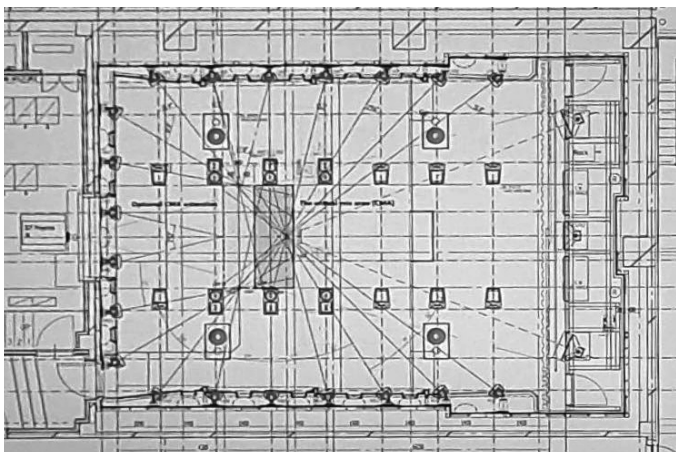
まずは解体等の施工状況に関する説明がされました。スクリーンを取り外した際に正面の LCR スピーカーがむき出しになった状態、そして今回はスピーカーの取り外しは行われないために、コンパネで養生をしている様子が写真で示され、Avid S6 の台が、分割されて搬入されて様子なども説明がされました。

今回使用されているラックの本数は映写室側に7本、スクリーン背後に2本設置されているとのことでしたが、改修前の機材との入れ替えがあったので、ラックの本数に変更はないとのことでした。スクリーン背後のラックにはスピーカーのアンプが収納されていて、正面スピーカーと接続するケーブルを最小限にしているとのことでした。

そして Mac Pro が6台、Mac Mini が1台、計7台の Mac を使用しているとのこと。(内訳は、再生用の Mac Pro が5台、マスターデータを収録するための MacPro が1台、Atmos レンダラー用の Mac mini が1台)

角川大映スタジオは、日本国内でも少ない Dolby Atmos Cinema に対応したダビングステージですが、特徴としては「最大64chのスピーカーに対応したレンダリングスト+ベースマネージメント機能」となっているとのこと。Dolby Atmos Home では、正面に設置した LFE に関するベースマネージメントですが、Dolby Atmos Cinema では大きな容積に対してのベースマネージメントが柔軟に対応出来るとのことでした。

そして今回のシステム改修コンセプトは、「システムの最小化によるシグナルパスの最短化」をすることで「変換を減らすことによる解



ダビングステージ スピーカー配置



施工時の足場と天井面スピーカー



(株)メディア・インテグレーション
前田 洋介氏

像度の向上”を実現することにあるとのことです。

Mac Pro 5 台のプレイアウト、収録用の Mac Pro、Dolby Atmos Renderer 等が、全て 1 台の MTRX2 に接続されて、D/A コンバーターとして採用されている RME M32-D Apro2 に繋がるまで、デジタルドメインで完結させているとのことでした。実際に MTRX2 背後にデジリンクケーブルが 16 本繋がる写真も示されました。

モニターコントロールは、“MTRX2+BSS BLU”を採用しており、MTRX2 で Source Sel.&Volume、BSS で一本一本のスピーカーの EQ & DLY 調整を行っているとのことで、こちらで日本音響エンジニアリングに音響調整をお願いしているとのことでした。

Dolby Atmos ではサラウンドの一本一本のスピーカーが 40Hz までフラットであることが推奨となっているので、これを実現するためのベースマネージメントは Dolby Atmos Renderer で処理を行っているとのことでした。

コンソールは AMS NEVE DFC Gemini から入れ替えとなり、国内最大規模の Avid S6 M40 72Fader が導入されていました。Master Touch Module (MTM) が 2 つの DualHead 仕様によって、マルチオペレーター等に柔軟な対応が可能となっています。ハリウッドの大きなダビングステージでは、殆どがこの DualHead 仕様になっているとのことでした。

また、Post Module が国内初導入されており、収録用 Pro Tools の録音 / 再生の切り替えが行えるようになってきているとのことで、この角川大映スタジオでは、5 台の Pro Tools からのステムに対して、録音 / 再生の操作がこの Post Module で選択して行えるとのことでした。

マスタークロックは、解像度を向上させるために Brainstorm DXD-16 を採用し、10M Clock をマスターとして、ワードクロックもこれから生成しているとのことでした。

運用性の向上のため ihse Draco 483 series (KVM Matrix Router) を採用し、沢山ある PC に対して、どの席からどの PC を使用するかの選択自由度を高めて



システム改修に関する前田 洋介氏による説明

いるだけではなく、アクセス制限等を掛けることも可能なので、様々な場面での運用に対しての安全も保てるようになってきているとのことでした。また、USB 2.0 50M のオプションも追加しているので、持ち込みの USB メディアがあった場合でも、PC 本体まで行かずに接続することが可能となっているとのことでした。

現状の Mac Pro は 10GbE 対応なので、そのスピードを生かせる NAS server “Promis Technology VTrak N1616” を導入しているとのことです。これは SSD × 6、HDD × 10 そして中に M.2 SSD も搭載され 3 レイヤーとなっており、そのアクセス状況により、自動的にデータに優先順位を付けて保存先を変更し、アクセスの少ないデータは HDD へ、アクセスの多いデータは SSD にする等を行い、高速なデータのやり取りを可能にする機能を持っているとのこと



でした。

以上、様々な拘りについて説明をいただきました。

最後に Dolby Atmos コンテンツの試聴を行い、見学が終了となりました。

見学会終了後は調布駅近くの懇親会会場へ移動し、多くの参加者の意見交換、交流が行われました。

スタジオ見学会開催にご協力いただきました、株式会社角川大映スタジオの皆様、本当にありがとうございました。



第 21 回 JAPRS 認定「Pro Tools 技術認定試験」実施報告

9月8日(日)、札幌×3、仙台×2、新潟×2、東京×7、小山、横浜、名古屋×4、大阪×4、広島、博多の10地区25ヶ所の団体受験会場に分散して、「第21回JAPRS認定Pro Tools技術認定試験」が実施されました。本年度の申請者数は792名に対して受験者数は681名となりました。

また、今回の試験については、昨年と同様に受験者個々のPro Toolsに関する知識をより明確に把握するために、初級50問(500点)、中級50問(500点)の出題構成とし、それぞれ「Pro Tools概要」「録音・編集」「ミキシング」「シンク・MIDI・ファイル管理など」に区分された出題としましたが、初級問題の正答率は75.7%、中級問題については66.4%、全体的な正答率は71.0%という結果になりました。



名古屋地区会場

以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

(1) 受験申請者 792 名 欠席者 111 名 受験者 681 名
最低点 170 点 最高点 1,000 点 (51 名) 総合平均点 709.8 点

(2) 平均点詳細

初級 1 (Pro Tools 概要 / 80 点) : 62.6 点
初級 2 (録音・編集 / 170 点) : 128.7 点
初級 3 (ミキシング / 130 点) : 102.2 点
初級 4 (シンク・MIDI・ファイル管理など / 120 点) : 84.4 点

◆初級計 346.1 点

中級 1 (Pro Tools 概要 / 90 点) 58.6 点
中級 2 (録音・編集 / 170 点) : 115.8 点
中級 3 (ミキシング / 100 点) : 69.1 点
中級 4 (シンク・MIDI・ファイル管理など / 140 点) : 88.5 点

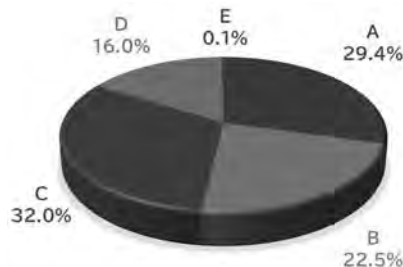
◆中級計 305.0 点

(3) 得点別人数

1000～900	208 名
890～800	80 名
790～700	74 名
690～600	73 名
590～500	92 名
490～400	89 名
390～300	57 名
290～200	7 名
200～	1 名
計	681 名

(4) ランク別人数

A ランク	1000～901 点	200 名
B 〃	900～701 点	153 名
C 〃	700～451 点	218 名
D 〃	450～201 点	109 名
E 〃	200 点以下	1 名
計		681 名



第2回 JAPRS 交流会

「JAPRS 交流会」とは、これまで行っていた「賛助会員交流会」、「JAPRS 忘年会」に代えて、若手からベテランまで幅広く会員間の親睦を深める新たな交流イベントとして、一昨年に第1回を開催しましたが、好評につき昨年の9月18日（水）、前年に引き続き、渋谷「南国亭」に於いて、法人正会員12社33名、賛助会員15社34名、個人正会員3名、その他1名、事務局2名の計75名の参加者により開催されました。

前回より多くの会員社に参加いただき、今回も会員同士での積極的な交流を図ることが出来る会となりました。

開催にあたり尽力いただきました総務および賛助委員会の方々に深く感謝いたします。



高橋会長による開催の挨拶



明地副会長による締めの挨拶



JAPRS 交流会の様子

「第34回 JAPRS ゴルフコンペ」レポート

10月17日（木）、茨城県牛久市の金乃台カントリークラブにおいて、第34回目を迎えたJAPRS ゴルフコンペが開催された。参加者はJAPRS 法人正会員10社13名、個人正会員2名、賛助会員3社3名、JAPRS 会員OB および関連会社等14名 合計8組31名で、早朝7:45に集合しクラブハウスでの受付が完了しました。

8:15にマスター室集合となり、賛助委員会 稲葉建設の萩原 一哉氏よりルール等の説明、JAPRS 高橋会長からの挨拶、そして参加者全員の記念写真を撮影後にIN、OUTコースに分かれ、コンペがスタートしました。

競技終了後、クラブハウス2F レストランにおいて順位発表がされ、本年度の優勝者・鈴木 高雄氏をはじめ、各賞が参加者に手渡されました。

最後に総務委員会 中村 隆一委員長の締めの言葉により無事コンペが終了しました。



優勝・鈴木 高雄氏



中村総務委員長



高橋会長

優 勝：鈴木 高雄 / スタージャムコーポレーション
準優勝：伊藤 猛 / バーディハウス
3 位：高橋 邦明 / キング関口台スタジオ
ベストグロス賞：萩原 一哉 / 稲葉建設
ニアピン賞：森 知明 × 2、堀口 泰史 × 2
ドラコン賞：永井 美由紀、大野 昌寛、萩原 一哉、高橋 邦明（敬称略）



スタート前の集合写真

Inter BEE 2024 賛助会員社ブースツアーレポート

(株) メディア・インテグレーション

岡田 詞朗

今回で60回目を迎えた「Inter BEE 2024」は、2024年11月13日（水）～15日（金）3日間、幕張メッセにて開催されました。出展者数1,058社/団体、出展小間数1,811小間の開催となり、結果33,853名（重複無しのユニーク数）の来場者がありました。昨年のInter BEE 2022の来場者数が31,702名でしたので、昨年比106%のアップとなり、個人的感想では初日午前中が例年に比べると混み合った印象がありました。



1965年に第1回を開催して以来、60回記念開催を迎えたInter BEEですが、今回から次の新たな10年を見据え、メディア&エンターテインメント産業分野の全体に貢献する「INTER BEE AWARD」が創設されました。このアワードはInter BEEに展示予定の製品もしくはサービスを対象として応募されたものの中から、特に優れていると評価されるものを選考し表彰するもので、優れた技術や製品を評価・表彰することにより、関連産業と市場の発展の後押しに貢献することを目指されるそうです。

今回のINTER BEE AWARDではプロオーディオ部門から賛助会員である株式会社ジェネレックジャパンが新製品であるGenelecのUNIO オーディオ・モニタリング・エコシステムで準グランプリを受賞されておりましたことをご報告させていただきます。

さて今回のInter BEE 2024 ブースツアーは後述のJAPRS賛助会員14社のご協力頂き、例年同様各社7～8分にて概要説明を頂きました。各社には最新の機器や現在注目されている機器等を中心に説明頂き、参加者の方からは時間効率の良さをお褒め頂きました。また参加頂いた方々にはお忙し中お時間を頂き、大変ありがとうございました。



次回の「Inter BEE 2025」は、2025年11月19日（水）から21日（金）の3日間、幕張メッセでの開催を予定されております。もちろん今年同様賛助委員会主催でブースツアーを開催したいと考えております。

最後に以下が今回の Inter BEE 2024 ブースツアーにご協力頂いた賛助会員一覧となります。

(アイウエオ順、敬称略)

オタリテック株式会社
株式会社オーディオテクニカ
有限会社グルーヴ
株式会社静科
株式会社スタジオイクイPMENT
シュア・ジャパン株式会社
ゼンハイザー・ジャパン株式会社
ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン株式会社
タックシステム株式会社
日本音響エンジニアリング株式会社
ヒビノインターサウンド株式会社
ミックスウェーブ株式会社
株式会社メディア・インテグレーション
株式会社ユーズドネット



JAPRS 2024 年度新人エンジニア育成研修会 実施報告

専門学校委員会主催による「2024 年度 新人エンジニア育成研修会～スタジオで働くために今何を学ぶか～」を、全国の専門学校から参加いただけるように ZOOM ウェビナーにてオンライン開催いたしました。

この研修会は、これから音楽スタジオ業界への就職を目指す JAPRS 賛助会員専門学校 1 年生を主な対象とし、レコーディングスタジオで働くということがどんなことなのか、またそこで働くためには何を学んでおけば良いのかを知っていただくために開催されています。

今回は、レコーディングエンジニアとミックス師の違いにも触れ、進路に対する意識付けを明確にする取り組みも行いました。

当日は、JAPRS 事務局をホストとして配信を行い、下記の内容で研修会を進行いたしました。

当日参加出来なかった学生に対してアーカイブ動画の配信も行っております。



【1部】

1. 会長挨拶「スペシャリストを目指して」

高橋 邦明 JAPRS 会長



YouTube でのアーカイブ動画配信

2. 「レコーディングスタジオとはどんな場所？」

山田 幹朗氏

ビクターエンタテインメント (株)

ビクタースタジオ エンジニアグループ FLAIR ゼネラルマネージャー

○レコーディングスタジオにはどんな仕事があるのか、そしてそこで働く人達との関わり的重要性や、アシスタントエンジニアはどんな仕事なのか、ミックス師との違いについて説明がされました。

最後に次の講師である(株)サウンド・シティ 明地氏にも登場いただき、レコーディングエンジニアとミックス師それぞれの特徴や業務の違い等について話がされました。



3. 「レコーディングスタジオでの働き方の変化、 そして今スタジオではどんな人材を求めているか？」

明地 権氏

(株) サウンド・シティ 代表取締役社長

- レコーディングスタジオにおける業務や働き方の変化やそれに対応するためのレコーディングエンジニアに必要な能力について説明がされました。



【2部】

4. 「エンジニアQ & Aコーナー」

司会進行：阿部 純也先生（東放学園音響専門学校）

参加エンジニア：

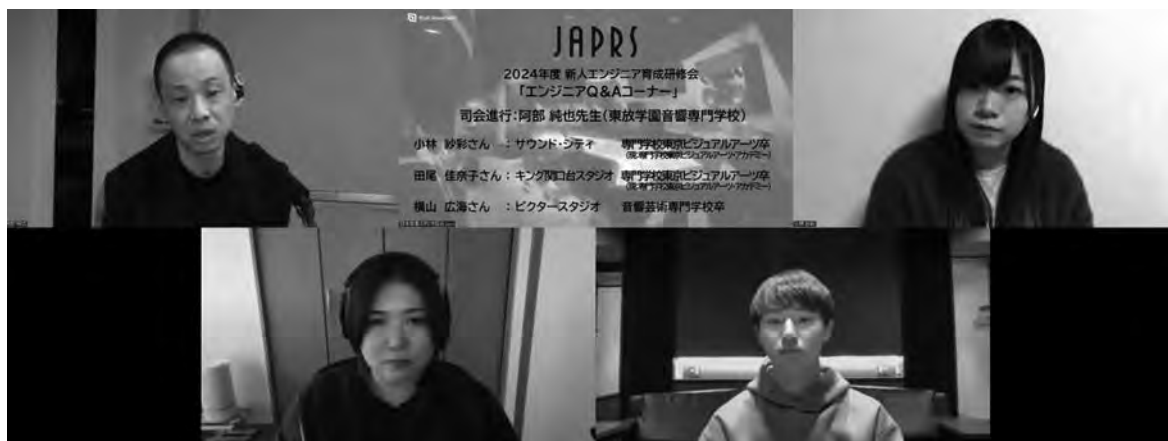
小林 紗彩氏	サウンド・シティ	/	専門学校東京ビジュアルアーツ卒
田尾 佳奈子氏	キング関口台スタジオ	/	専門学校東京ビジュアルアーツ卒
横山 広海氏	ビクタースタジオ	/	音響芸術専門学校 卒

- 休憩を挟んで第2部、阿部先生（東放学園音響専門学校）の司会進行により、現場で働くエンジニア3名から、今スタジオで毎日どんな仕事をしているのか、入社するまでの経緯やどうしてレコーディングスタジオを目指したのかなど、様々な質問に答えていただく形で進行しました。

レコーディングの現場で働いている年齢も近い先輩方からの実体験に基づく話は、学生にとって大変興味深い内容で、今後の学生生活で何を学んで行くべきなのか、大きな指針となりました。

司会進行 東放学園音響専門学校
阿部 純也氏

サウンド・シティ
小林 紗彩氏



キング関口台スタジオ
田尾 佳奈子氏

ビクタースタジオ
横山 広海氏

5. 「JAPRS からのインフォメーション」

- 2025年 JAPRS 企業説明会

2025年5月開催を予定（対面開催およびアーカイブ配信を予定）

- レコーディングセミナー（スタジオワーク編）

2025年6～7月開催を予定（東京、名古屋、大阪地区開催）

○JAPRS 技術認定試験

2025年7月6日(日) サウンドレコーディング技術認定試験

2025年9月7日(日) Pro Tools 技術認定試験

レコーディングスタジオやエンジニアの仕事、そしてその業界で働くということの現実について、参加者皆により具体的に伝わることを目指して研修会を開催しましたが、多くの学生がこの業界に興味を持つきっかけとなり、そしてこれからの学校生活の中で何を学ぶべきかのヒントを得ていただけたなら幸いです。

ご協力いただいた講師の皆様、エンジニアの方々に心より感謝申し上げます。

ユニバーサル ミュージック Dolby Atmos 納品仕様説明会 & Augusta Studio 試聴会

JAPRS 技術委員会では、Dolby Atmos 納品に関する問題解決に向けてユニバーサル ミュージックの Dolby Atmos 納品仕様説明会、および Dolby Atmos Music Curve 周波数特性に調整された同社の "Augusta Studio" における Dolby Atmos 試聴会を下記概要で開催いたしました。

日 時：令和6年11月29日（金）

会 場：ユニバーサル ミュージック合同会社

内 容：1. Universal Music Group Dolby Atmos 納品仕様説明会
2. UNIVERSAL MUSIC STUDIOS HARAJUKU /Augusta Studio Dolby Atmos 試聴会
(Dolby Atmos Music Curve 周波数特性に調整されたスタジオでの Dolby Atmos 試聴)



ユニバーサル ミュージック(同)
那須 研吾氏 山田 忍氏

今回は Dolby Atmos 納品仕様説明会ブロック(1時間×1回)とスタジオ試聴会ブロック(30分×5回)を分けて開催し、時間帯を選んで参加する形としました。

13時30分からはユニバーサル ミュージックの Dolby Atmos 納品仕様説明会が開催されましたが、24名という多くの参加者が集まったことから関心の深さが窺えました。

Dolby Atmos 納品仕様説明会は、ユニバーサル ミュージック(同)のスタジオ&アーカイブ部 部長の那須 研吾氏のご挨拶から始まり、続いて同部署の山田 忍氏から納品仕様に関する説明へと続きました。

説明会終了後も参加者は会場に残って質問や意見交換をする場面が見られ、今後の情報共有等に向けた連携も期待されます。

(※ユニバーサル ミュージックの納品仕様に関する資料については、参加者および会員社に対して別途お送りいたします。)



Dolby Atmos 納品仕様説明会の様子

「Augusta Studio」では、Dolby Atmos Music Curve 周波数特性に調整された再生環境で Dolby Atmos 試聴会が行われました。

ユニバーサル ミュージックの Dolby Atmos 対応スタジオは、現在アメリカ国内 12 ヶ所、イギリス 5 ヶ所、日本 3 部屋あるとのことですが、全てのスタジオが同じ基準で作られており、その基準がロサンゼルスにあるキャピトルスタジオのスタジオ C となっており、このスタジオがアメリカ国内で、音楽用 Dolby Atmos Music 対応として初めて作られたスタジオとのこと。そして、同じ基準にて 3 月にリニューアルされたスタジオが今回の試聴会が行われた「Augusta Studio」とのことです。（※スピーカー構成については、提供いただいた紹介資料を参照ください。）

この部屋は元々ステレオのレコーディング対応で、ブースも併設されていました。作業内容によって、ステレオ・セッティング、Dolby Atmos セッティングを使い分けているとのこと。

Dolby Atmos Music のスタジオ推奨仕様に則って調整されており、各チャンネル 40Hz ~ 18kHz ± 3dB を満たしているとのこと。

また、Dolby Atmos Music のミックス作業をする際は、部屋の周波数特性を Dolby Atmos Music Curve に合わせる事が推奨されており、この部屋もそれに合わせて調整されているとのこと。（スピーカーからピンクノイズを再生し、リスニングポイントにマイクを立ててリアルタイムアナライザーで測定し、この特性なるように調整されているとのこと。）

以前ステレオ仕様に調整されていたスタジオで Dolby Atmos ミックスの仕上がりを聴いたところ、若干暗めに感じるという話があったこともあり、現在ユニバーサル ミュージックの全スタジオでは、このターゲットカーブに合わせた調整をしているとのこと。



「Augusta Studio」試聴会に対応いただいた
山田 忍氏 松村 学氏



「Augusta Studio」での試聴会の様子



スタジオ正面のスピーカー
(ステレオ・セッティング用のスピーカーも見える)



壁面のセットされた PMC ci65
(ハイトチャンネルも同型をセット)



後方にセットされた PMC ci140

スタジオ仕様等に関する説明の後は、参加者の選んだDolby Atmosコンテンツ等により、試聴会が行われました。（※以下、ご提供いただきましたスタジオ紹介資料を貼付いたします。）



アメリカ国内12カ所、イギリス5カ所、日本3カ所



全ての基準となるキャピトルスタジオ スタジオC



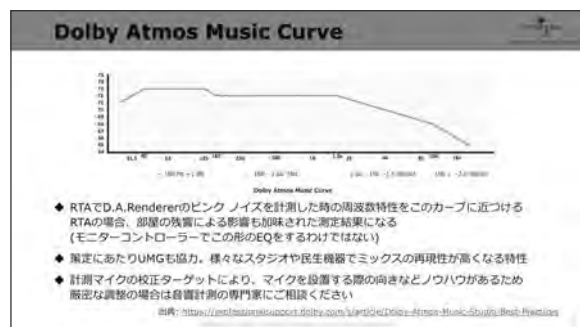
今回試聴会を行った「August Studio」



スピーカー構成および機種



ステレオとDolby Atmosのセッティング使い分け



Dolby Atmos Music Curveの説明



貴重な説明会、試聴会を開催いただいたユニバーサル ミュージック（同）スタッフの方々に感謝申し上げます。

第30回日本プロ音楽録音賞の開催と授賞式レポート

「日本プロ音楽録音賞」は、平成6年に当協会が制定した「JAPRS 録音賞」を出発点とし、音楽制作、録音に対する認識を高め、音楽産業の更なる質の向上、録音技術者の地位の確立などを目的として、平成6年より実施されているものです。

今回節目となる30回目の実施にあたり、一般社団法人日本音楽スタジオ協会および一般社団法人日本オーディオ協会、特定非営利活動法人日本レコーディングエンジニア協会、一般社団法人日本レコード協会、一般社団法人MPNの5団体が主催し、経済産業省の後援および日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、株式会社ステレオサウンドの協賛、サウンド&レコーディング・マガジン、CDジャーナル、ステレオサウンド、オーディオアクセサリー、アナログ、ステレオの賛助、並びにNPO法人ミュージックソムリエ協会、(株)ソニー・ミュージックソリューションズ/mora/ソニー・ミュージックスタジオ、Xandrie Japan (株)、オトトイ (株)/OTOTOY、(株)サウンド・シティ、(株)パナソニック、(株)ミキサーラボ/ワーナーミュージック・マスタリング、ビクターエンタテインメント (株)/ビクタースタジオ、オタリテック (株)、東放学園音響専門学校、日本コロムビア (株)、(株)キング関口台スタジオ、東洋化成 (株)、(株)JVCケンウッド・クリエイティブメディアの協力により「第30回日本プロ音楽録音賞」を実施いたしました。

なお今回も前回に引き続き、一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会(SARTRAS)の共通目的基金の助成を受け運営いたしました。



第30回日本プロ音楽録音賞ポスター



高田運営委員長

そして、令和6年12月6日(金)の「音の日2024」式典の一環として授賞式をKANDA SQUARE HALLに於いて開催し、はじめに高田会長が運営委員長として開会の辞を述べられ、続いて本賞に対し後援を得ている経済産業省 商務・サービスグループ 文化創造産業課 課長補佐 腰田将也氏が来賓代表として挨拶された後、各部門の表彰に先駆けて第30回記念式典を執り行いました。まず、設立当初からの運営に大きな功績を残された4名の方々を「特別功労者」としてご紹介、また第30回の記念として「特別功労賞」2名、「第30回特別顕彰 ベストエンジニア賞」1名の顕彰が行われ、それに続いて各部門の最優秀作品発表および受賞者の表彰が行われました。(※「第30回記念式典」については38頁に掲載いたします。)

応募作品の分類については以下の通りとし、審査は以下の5部門、ベストパフォーマー賞を対象に行われ、全123作品の応募からBest Master Sound部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」：2作品、Best Master Sound部門「ポップス、歌謡曲」：2作品、Immersive部門：2作品、アナログディスク部門：2作品、放送部門「2chステレオ」：2作品、放送部門「マルチchサラウンド」：2作品がそれぞれ優秀作品としてノミネートされ、その中から各部門1作品を最優秀作品として選定し表彰、更にベストパフォーマー賞の表彰も行われました。また、アナログディスク部門最優秀作品をカッティングしたスタジオをカッティングスタジオ賞、作品制作に貢献した2つのスタジオをスタジオ賞、



経済産業省
商務・サービスグループ
文化創造産業課
課長補佐 腰田 将也氏

そしてこれからの活躍が更に期待できるエンジニア2名をニュー・プロミネント賞として表彰いたしました。

Best Master Sound 部門：CD、DVD、BD & ノンパッケージ
クラシック、ジャズ、フュージョン／応募総数 30 作品
ポップス、歌謡曲／応募総数 36 作品
Immersive 部門：サラウンド作品全般／応募総数 20 作品
アナログディスク部門：ジャンル問わず／応募総数 14 作品
放送部門：2ch ステレオ／応募総数 17 作品
(ラジオ番組：AM、FM、衛星放送) (有線放送)
(テレビ番組：地上波、衛星放送)
マルチ ch サラウンド／応募総数 6 作品
(テレビ番組：地上波、衛星放送)
ベストパフォーマー賞

今回は、各部門の最優秀作品、優秀作品を紹介するとともに、受賞された代表エンジニアの方々およびベストパフォーマー賞のアーティストに受賞の感想・コメントをいただきましたので、41 頁以降に掲載させていただきます。



第30回日本プロ音楽録音賞は、一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会 (SARTRAS) の共通目的基金の助成を受け運営されました。

<http://sartras.or.jp>



共通目的事業・助成事業



日本プロ音楽録音賞 第30回記念式典

30回の節目となる今回の日本プロ音楽録音賞授賞式では、各部門の最優秀作品発表および受賞者の表彰に先駆けて、第30回記念式典として設立当初からの運営に大きな功績を残された4名の方々を「特別功労者」としてご紹介させていただき、感謝の意を表しました。

また、第30回記念顕彰として日本プロ音楽録音賞の発展に尽力された2名の方を「特別功労賞」、本賞において過去最多の受賞をされたエンジニアを「第30回特別顕彰 ベストエンジニア賞」として顕彰いたしました。

○特別功労者

中島 平太郎様 (工学博士)

1921年 福岡県生まれ。

1944年～ NHKに勤務。

1971年～ ソニー株式会社に勤務。

1992年から2001年までの10年間、

日本オーディオ会長を務める。

1993年 CD開発の功績により紫綬褒章を受章。

1993年 JAPRS録音賞として進めていたイベントを、当時日本オーディオ協会会長であった中島平太郎氏が中心となり、音楽&オーディオ業界全体で進めて行く事を提案され、1994年に第1回日本プロ音楽録音賞として纏めて頂き、今年度で第30回となる節目の開催を迎えることとなりました。



菅野 沖彦様 (レコーディングエンジニア&オーディオ評論家)

1932年 東京生まれ。

フリーの録音作家を経て、オーディオ・ラボを設立。

1971年から「オーディオ・ラボ」レーベルにて、名演奏・名録音として名高い数多くのジャズレコードなどを制作・発売。

一方、オーディオ評論家として多くの専門誌に執筆。

『ステレオサウンド』誌においては、創刊2号(1967年)から四十数年にわたりオーディオ評論の第一人者として活躍されました。

1994年 第1回日本プロ音楽録音賞からアコースティック録音を中心に審査委員長を担当、日本プロ音楽録音賞の審査基盤を構築し、録音制作に携わるエンジニア顕彰の大切さと、音楽録音制作に携わるエンジニアに対して個性化そして録音に向き合うフィロソフィーの重要性を伝え、本賞の発展に尽力を頂きました。



冨田 勲様 (作曲家&シンセサイザー・プログラマー)

1932年 東京生まれ。

クラシックの名曲をシンセサイザー用にアレンジし、シンセサイザーの普及に大きな役割を果たしたミュージシャン&作曲家。ビルボードクラシカルチャート連続第1位を獲得した「展覧会の絵」、「月の光」、「惑星」などの作品で世界的名声を確立。

1997年の第4回日本プロ音楽録音賞からオーディオ・ノンアコースティック部門(ポップス録音・打込み系作品を含む)審査委員長



を担当され、その後サウンド部門の審査委員長として常に新しいサウンド創りをエンジニアに求め、日本プロ音楽録音賞の発展に尽力を頂きました。

浅見 啓明様 (元 NHK 制作技術局&社団法人日本音楽スタジオ協会会長)

1930年 神奈川県生まれ。

1955年 NHK「ミキサー職」第一号。

1960年 イタリア賞受賞 三善晃作曲「オンディーヌ」でグランプリを獲得し「日本の名人芸」と賞賛される。

1962年 芥川也寸志 作曲「廣島のオルフェ」でザルツブルグ オペラ賞を受賞。

2002年～2005年 社団法人日本音楽スタジオ協会会長に就任。

1995年 第2回日本プロ音楽録音賞から放送部門の審査委員長を担当され、放送番組にて音楽録音制作するエンジニアにスポットを当て、日本プロ音楽録音賞の発展に尽力を頂きました。

クラシック音楽にも精通され、クラシック音楽の審査については多くのアドバイスを頂きました。



○特別功労賞

株式会社ミキサーズラボ 会長 内沼 映二 様

日本プロ音楽録音賞設立から総合プロデューサーとして本賞の発展に尽力され、時代に即した運営および次世代エンジニア発掘に貢献されました。

一般社団法人MPN 会長 椎名 和夫 様

日本プロ音楽録音賞に「ベストパフォーマー賞」を設立し、音楽録音技術とアーティストによるパフォーマンスの融合による音楽創造の重要性に着目することで、本賞の発展に貢献されました。

○第30回記念顕彰 ベストエンジニア賞

日本コロムビア株式会社 塩澤 利安 様

日本プロ音楽録音賞の最多受賞エンジニアとして認定し、その音楽に対する感性及び技術力を称えベストエンジニア賞として選定いたしました。



特別功労賞とベストエンジニア賞の顕彰楯

第30回 日本プロ音楽録音賞 授賞式次第

一、主催者代表挨拶

第30回日本プロ音楽録音賞 運営委員長

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

常任理事 高田 英男

二、ご来賓ご挨拶

経済産業省 商務・サービスグループ

文化創造産業課

課長補佐 腰田 将也様

三、第30回記念 特別功労者の紹介及び特別功労賞

・ベストエンジニア賞の授与

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

常任理事 高田 英男

四、最優秀作品・優秀作品の発表及び表彰並びに審査員講評

Best Master Sound 部門 クラシック、ジャズ、フュージョン

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

特定非営利活動法人日本レコーディングエンジニア協会

理事長 吉田 保

Best Master Sound 部門 ポップス、歌謡曲

一般社団法人日本レコード協会

理事 須貝あゆみ

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

常任理事 三浦 瑞生

Immersive 部門 (スタジオ賞 授与を含む)

一般社団法人日本オーディオ協会

専務理事 末永 信一

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

常任理事 高田 英男

アナログディスク部門 (カッティング・スタジオ賞授与を含む)

一般社団法人日本レコード協会

理事 須貝あゆみ

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

会長 高橋 邦明

スタジオ賞

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

会長 高橋 邦明

ニュー・プロミネント賞

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

名誉会長 内沼 映二

五、ベストパフォーマー賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人MPN

副理事長 角田 敦

理事長 倉田 信雄

六、最優秀作品・優秀作品の発表及び表彰並びに審査員講評

放送部門 2ch ステレオ

日本放送協会 メディア技術局

専任局長 高橋 直幸

放送部門 マルチ ch サラウンド

日本放送協会 メディア技術局

専任局長 高橋 直幸

株式会社 dream window

代表 深田 晃(動画)

以上

第30回 日本プロ音楽録音賞 受賞エンジニア & 作品紹介

Best Master Sound 部門 「クラシック、ジャズ、フュージョン」 (写真は☆印の代表エンジニア)

[最優秀賞]

■作品「マーラー：交響曲第5番」より「マーラー：交響曲第5番より第2楽章」
アンドレア・バッティストーニ 指揮 東京フィルハーモニー交響楽団

発売元：日本コロムビア株式会社 96kHz/24bit 2ch

☆ミキシング・エンジニア：塩澤 利安 (日本コロムビア株式会社)

<受賞のことば>

この度は名誉ある賞に選定して頂き大変光栄に思います。常に多くの目標を持って様々なレコーディングに臨んでいます。 「日本プロ音楽録音賞受賞」も私の目標の中の一つです。目標の一つ達成出来たことに心から喜びを感じております。



今回受賞した作品は、2022年9月に開催した熱気に満ちたコンサートのライブ録音です。首席指揮者アンドレア・バッティストーニ氏と東京フィルハーモニー交響楽団の名コンビによる演奏を作品として届けることができました。

録音はBunkamura オーチャードホールによるものです。マーラーの代表曲のひとつとして最も人気のある交響曲は、複雑なスコアの隅々にメロディ、対旋律、その他が同時に奏でられる全ての声部に生き活きとした命が吹き込まれて、多様な物語が強い説得力を持って迫ってきます。

そんなエネルギーに満ちた音楽は会場に鳴り響き、私は全てを余すことなく捉えることに集中しました。マイクセッティングに関しては特別なことは行っておりません。ミックスに関しましては、複雑なスコアの内容が音として全て見える様に心掛けました。

この作品創りに於いてコンサートよりももっと深い感動を音だけで表現することができるか、直感的な印象も大切にしながらベストなサウンドを目指しました。何かを感じ取って頂ける作品となったのではないのでしょうか。

最後になりますが、素晴らしい演奏を創り上げた皆様、制作に携わった全ての方々に心から感謝いたします。ありがとうございました。

○マスタリング・エンジニア：佐藤 洋 (日本コロムビア株式会社)

○アシスタント・エンジニア：久志本 恵里 (日本コロムビア株式会社)

[優秀賞]

●作品「FINAL FANTASY VII REBIRTH Original Soundtrack」より
「ギ・ナタタク」 島翔太郎 植松伸夫

発売元：SQUARE ENIX CO., LTD. CD

☆ミキシング・エンジニア：今関 邦裕
(株式会社サウンド・シティ)



<受賞のことば>

この度は Best Master Sound 部門 優秀賞に選定いただきありがとうございます。

今作はスクウェア（現スクウェア・エニックス）が1997年にSonyのゲーム機 初代プレイステーション用ソフトで発売した『Final Fantasy 7』（以下略 FF7）のリメイク作品で、現代の技術で完全リメイクされた全3部作の2部作目『Final Fantasy 7 Rebirth』（以下略 FF7R）の物語の途中で現れるボス曲になります。

2部作目にも関わらず、このFF7Rだけでも400曲を超える曲数に上ります。

私が担当したのは作曲家の島翔太郎さん担当分で、作品のメインどころを担っており、それだけでも100曲を超える楽曲になりました。

ボス戦の戦闘曲は、プレイヤーが敵に一定数ダメージを与えるとパワーアップし更に強くなり、段階的にその都度曲のアレンジが変化していくのですが、変化と共に派手にしていけばいいのですが初めて対峙するボスとのインパクトを印象付けるために1段階目からフルスロットルのアレンジが来ます。

変化するとテンポが上がり緊張感を高めアレンジも更に派手になって行く訳ですが、200trを超える音数とオケ構成だとスペースが奪われ飽和して行きがちになるのをコントロールするのが大変難しく、最終段階に向けて初段を控えめには出来ないのでトータルのEQの処理で段々とわざと耳障りにしていく様施したりリミッティングの処理を変化させたりと一筋縄では行かない事に毎回チャレンジしております。

世界中のファンから高い評価をいただいております、この作品に携われた事に心より感謝申し上げます。

○マスタリング・エンジニア：小泉 由香（有限会社オレンジ）

Best Master Sound 部門 「ポップス、歌謡曲」（写真は☆印の代表エンジニア）

[最優秀賞]

■作品「配信シングル」より「Sweetest Tune」 Travis Japan

発売元：ユニバーサル ミュージック合同会社 フォーマット：44.1kHz/16bit 2ch

☆マスタリング・エンジニア：酒井 秀和

（株式会社ソニー・ミュージックソリューションズ）

<受賞のことば>

この度は、第30回日本プロ音楽録音賞、Best Master Sound 部門「ポップス、歌謡曲」にて、最優秀賞にご選定いただき、心より感謝申し上げます。

今回担当した受賞曲「Sweetest Tune」はリズムとメロディがバランス良く調和し、ダンスミュージックが持つグルーブ感をしっかりと感じられる楽曲です。

それぞれの音の立ち上がりが絶妙で、軽快に曲が展開していきます。シルキーな高域と厚みのある低域が心地良い音像を作り出しています。

サウンドの方向性はミックス段階で既に明確に表現されており、特にリズムの組み立てが素晴らしく、中高域と低域の関係性がしっかりと整理されています。

また、歌を中心に各音が分離良く定位し、広い音像を持って楽曲のアンサンブルが非常



に良く伝わってきます。

マスタリングではミックスのバランスを踏襲しながら、音の動きがより鮮明に感じられるようにEQを施し、配信時のラウドネス値を考慮してダイナミクスを調整しています。この楽曲の素晴らしさをエンジニアリングで十分に表現でき、その成果を評価していただけたことを心より嬉しく思っております。

日々、さまざまなリスニング環境で再生される事を考えながら音のバランスを調整していますが、どんな場所や機器でも楽曲の良さがしっかり伝わるような音作りを目指して、これからも努力していきたいと思えます。

今回このような荣誉ある賞を頂き、レコーディング・エンジニアの松橋さんをはじめ、これまでに関わってくださったすべての方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

○ミキシング・エンジニア：松橋 秀幸（株式会社バーディハウス）

○アシスタント・エンジニア：大島 丈明（株式会社プラネット・キングダム）

[優秀賞]

●作品「配信シングル」より「Sunset Girl」 I Don't Like Mondays.

発売元：AVEX MUSIC CREATIVE INC. 96kHz/24bit 2ch

☆ミキシング・エンジニア：安達 義規（株式会社ミキサーズラボ）

<受賞のことば>

この度は第30回日本プロ音楽録音賞 Best Master Sound 部門「ポップス、歌謡曲」にて、優秀賞に選定して頂き大変光栄に思っています。

I Don't Like Mondays. とはデビューの頃から音へのこだわりを常に意識して一緒にやってきました。

彼らは4人組のバンドですが、打ち込みにもとても精通しており今までもさまざまなジャンルのサウンドに挑戦してきました。

今回の作品はデビュー10周年の節目の年に、原点回帰ということでバンドスタイルにこだわって制作した一曲です。

意識して目指したのは聴いていて心地の良いサウンドです。

何度聴いても疲れないう柔らかなサウンドを基本軸にしながら今の時代にあったLow感やM/Sを意識しました。

ドラムとベースのグルーブ感、ギターのエフェクトなど後処理に頼らず音作りの段階から時間をかけてサウンドメイキングをして、ナチュラルなグルーブ感が出るまでこだわって録りました。

山崎さんの素晴らしいマスタリングのおかげもあり、メンバー、スタッフ共にとても満足のいく作品ができたと話しておりましたので、このような賞を実際にいただけてとても励みになりました。

このような素晴らしい機会を与えて下さった、メンバースタッフの皆様に改めて心より感謝申し上げます。



- マスタリング・エンジニア：山崎 翼 (Flugel Mastering)
- アシスタント・エンジニア：吉見 潮音 (株式会社ミキサーズラボ)

Immersive 部門 (写真は☆印の代表エンジニア)

[最優秀賞] (プログラミング・サウンド)

■作品 「天球の音楽 ミュージック・オブ・ザ・スフィア — イマーシブ・クラシック」より
「メタモルフォシス I ～2台のピアノのための～」長谷川慶岳 (作曲)、後藤友香理 (ピアノ)

発売元：スチュディオ・エクレール 360 Reality Audio

☆ミキシング・エンジニア：鈴木 浩二 (株式会社ソニー・ミュージックソリューションズ)

<受賞のことば>

この度 Immersive 部門 最優秀録音賞を頂き、大変嬉しく光栄に思います。

本作品は、360 Reality Audio を用いてクラシック楽曲をいかに立体化できるか、音楽表現としての立体音響の可能性を探る、制作者、奏者、作曲家、そしてエンジニアの共働による実験的挑戦が実を結んだ作品です。



2台のピアノのための楽曲に対し立体設

計図を作成、収録では音楽ホールの空間を捉える上下前後のマイクと、ピアノに近接したオンマイクとのバランスをとる形でのセッティングになりました。

その上で、楽曲を分解してパーツやフレーズごとに演奏してもらい多重録音をし、ミックスで再構築していきました。通常の自然な演奏のように組み立てるために細かなディレクションが入りました。

ミックスでは、物理的なホール空間の再現だけではなく、音楽自体を立体に組み上げていくことを考えて 360RA WalkMix のパレットに広げていきました。苦勞した点は、フレーズ毎に響きを含めた 20トラック以上があり、多点の同時定位のみならず、パーツを複数同時に動かしたことです。

聴き手を空間ではなく音楽の中に没入させる新しい立体感への挑戦でした。

アルバムに収録した3曲は、音楽表現に即した立体空間のサイズ感、音像の大きさに試行錯誤を重ね、それぞれに立体サウンドの趣向を変えています。ぜひお聴ききいただけたら幸いです。

○アシスタント・レコーディング・エンジニア：房野 哲士

(株式会社ソニー・ミュージックソリューションズ)

[最優秀賞] (アコースティック・サウンド)

■作品 「スキマスイッチ [Anniversary EP]」より
「ボクノート ～ for 20th Anniversary with Orchestra ～」スキマスイッチ

発売元：ユニバーサル ミュージック合同会社 360 Reality Audio

☆ミキシング・エンジニア：甲斐 俊郎（株式会社 ARLT）

<受賞のことば>

この度は、2024年日本プロ音楽録音賞 Immersive 部門において最優秀賞をいただき、ありがとうございます。

今回のプロジェクトに携わることができたのは、素晴らしいアーティストやミュージシャン、そして制作チーム皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

特にアーティストのビジョンをミックスダウン時に音として具現化する過程で、スキマスイッチのお二人に多くのインスピレーションを頂きました。

360 Reality Audio という私にも、アーティストにも初めてのフォーマットでありましたが、試行錯誤しながら感性を頼りに作ったものが評価をいただけたことは大変嬉しいことでした。

今後も精進して参ります、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございました。



○セカンド・エンジニア：米山 雄大（株式会社ソニー・ミュージックソリューションズ）

アナログディスク部門（写真は☆印の代表エンジニア）

[最優秀賞]

■作品「MIXER'S LAB SOUND SERIES Vol.4」より

「小さな花」角田健一ビッグバンド

発売元：株式会社ミキサーズラボ 30cm 33 1/3 回転

☆カッティング・エンジニア：北村 勝敏

（株式会社ミキサーズラボ ワーナーミュージック・マスタリング）

<受賞のことば>

この度は第30回日本プロ音楽録音賞、アナログディスク部門で誉高き賞を頂き、大変嬉しく思っております。このような機会に恵まれるたびに素晴らしい音源に携われたことと有能なスタッフ、メンテナンスの行き届いたマシンに感謝の念が絶えません。

今回のビッグ・バンドの音源は初のアナログ・テープでハーフ・インチ、76cm/s という闘志を掻き立てられる仕様です。ダイナミック・レンジが広く、高音域から低音域まで周波数レンジの広いこの音をカッティングするだけでなく、最も重要なことはレコード盤になった後、ピック・アップでトレースできる音溝にしなくてはなりません。応募作品の「小さな花」はレコード盤面3曲入りの3曲目で、レコード盤の特製条件は不利です。R-chにはミュート・トランペット、L-chにはハイ・ハットという定位で、どちらも高音域成分がたっぷり含まれた音源です。艶やか



なクラリネットの音色を再現するためにも高音域成分を崩壊させるわけにはいきません。今回はイコライザー補正も行わず、カッティング・マシンの微調整を繰り返してカッティングしました。一方で豊かな拡がりがある低音域もレコード盤に於いては音溝切れや接触を起こす要因です。基本音溝幅の設定や音溝のピッチ調整もカッティング・マシンのヴァリアブル・ピッチ機能に頼り切ること無く、リアル・タイムで微調整を行いながらカッティングいたしました。

○ミキシング・エンジニア：内沼 映二（株式会社ミキサーズラボ）

○カッティング・スタジオ：

株式会社ミキサーズラボ ワーナーミュージック・マスタリング

[優秀賞]

●作品「JOHN WILLIAMS IN TOKYO」より「THRONE ROOM & FINAL」

JOHN WILLIAMS / SAITO KINEN ORCHESTRA

発売元：ドイツ・グラモフォン / ユニバーサル ミュージック合同会社 30cm 33 1/3 回転

☆ミキシング・エンジニア：深田 晃（株式会社 dream window）

<受賞のことば>

作品にたいして御評価いただきありがとうございます。
ごぞいます。

故小澤征爾氏との長年の交流の結果。30年ぶりに来日した John Williams 氏が指揮したサイトウ・キネン・オーケストラの力のこもった演奏をレコードに収めることが出来、またドイツ・グラモフォンとの仕事のできた事を光栄に思っています。この仕事のチャンスを頂いた皆様に改めてお礼申し上げます。このレコードはドイツ・グラモフォン 125 周年のガラ・コンサートの一つとして計画されました。コンサートでは作曲家・演奏家。観客が一体となりとても熱い音楽が生まれていました。

John Williams 氏とオーケストラの共演は今までウィーンフィル、ベルリンフィルなどで行われています。日本のサイトウ・キネン・オーケストラの演奏はそれらと比べても演奏自体を楽しみ、作曲家に対する敬意を感じられる素晴らしい演奏でした。

サントリーホールでの演奏会の数日前に松本で行われている、セイジオザワ松本フェスティバルでも同じプログラムが演奏されており、John とオーケストラの信頼関係はすでに構築されていました。サントリーホールでのリハーサルもほとんどない中、集中して演奏できたのはその成果ではないかと思えます。

その熱い演奏をレコードで楽しんでいただければ幸いです。

○カッティング・エンジニア：手塚 和巳（東洋化成株式会社）

○カッティング・スタジオ：東洋化成株式会社



カッティングスタジオ賞

[最優秀賞]

■作品 「MIXER'S LAB SOUND SERIES Vol.4」より「小さな花」
角田健一ビッグバンド

発売元：株式会社ミキサーズラボ 30cm 33 1/3 回転

受賞カッティングスタジオ：

株式会社ミキサーズラボ ワーナーミュージック・
マスタリング



スタジオ賞

■作品 「スキマスイッチ「Anniversary EP」」より
「ボクノート～for 20th Anniversary with Orchestra～」スキマスイッチ

発売元：ユニバーサル ミュージック合同会社 360 Reality Audio

受賞スタジオ：アバコスタジオ



■作品 「MIXER'S LAB SOUND SERIES Vol.4」より「小さな花」

発売元：株式会社ミキサーズラボ 30cm 33 1/3 回転

「BIGBAND SUPREME」より「シボネー」

発売元：株式会社ワーナーミュージック・ジャパン 96kHz/24bit 2ch

受賞スタジオ：ビクターエンタテインメント株式会社 ビクタースタジオ



ニュー・プロミネント賞

■ミキシング・エンジニア：久志本 恵里（日本コロムビア株式会社）

作品：「わたしを束ねないで」より

「ロジャー・キルター「3つのシェイクスピアの歌」Op.6 より第2曲：愛しい人よ」

上村誠一（カウンターテナー）

発売元：日本コロムビア株式会社 96kHz/24bit 2ch

※Best Master Sound 部門 クラシック、ジャズ、フュージョン エントリー作品

<受賞のことば>

この度は第30回日本プロ音楽録音賞ニュープロミネント賞に選定していただき、大変光栄に感じております。

私は学生の頃より生楽器の録音に高い関心を持ち、特にホールでの収録ができるようになることを志して日本コロムビアでお仕事をさせていただくようになり、経験ゼロからこれまでホールにおいてもスタジオにおいても、アシスタントから見学、お手伝いまで、経験のためと多くの現場に入れていただきました。

社内だけでなく社外の方も含め周りの方々から寛大にもそれを受け入れていただき、温かく声をかけてくださったり、時に厳しい声もいただいたり、様々な面で助けていただくことがなければお仕事を続けてこのような賞をいただくことは叶わなかったと思います。これまで見守ってくださった皆様へ心より感謝申し上げます。

この作品は高崎芸術劇場の音楽ホールでの収録で、何度か伺ったことがあるので響きの美しさもよく存じておりましたが、カウンターテナーの上村さんにお会いしてホール内でリハーサルを聴かせていただいた時に歌声の美しさとホールの響きがとてもよくマッチしていると感じたことが強く印象に残っていて、自分のふれたこの感動をたくさんの人に届けたいという一心でつくりました。

その作品でこのように形に残る評価をいただけたことは私にとって大変励みとなります。今後も研鑽を積み、よりよい作品づくりをもって音楽制作に貢献できるよう努めてまいります。



■ミキシング・エンジニア：田宮 空（株式会社ミキサーズラボ）

作品：「墮楽」より「GAMESET」Cena

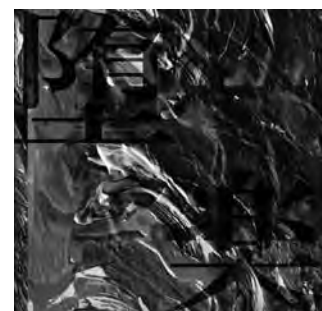
発売元：株式会社ラブレア・エンタテインメント 48kHz/24bit 2ch

※Best Master Sound 部門 ポップス、歌謡曲 エントリー作品

<受賞のことば>

この度は、このような素晴らしい賞をいただき大変光栄に存じます。

本作品はデモ音源から素晴らしく、インパクトの強い楽曲で、Rec前から妄想が膨らんでMixに向けて終始ワクワクしていました。



作曲した竹内 聖さんの奇抜かつ秀逸なアレンジとトラッキング、圧倒的な歌唱力・表現力をもつ Cena さんが書く独特な世界観の歌詞。

Mix は大胆に世界観を作りながらも、一文字ごとに EQ をしたり隅々まで細かい調整を施しました。

全体的に意識したことは” ストリーミング映え” です。

マスタリングはダイナミクス（流れ）を重視する為、できるだけレベルを最小限でお願いしました。

山崎さんのマスタリングがとにかく素晴らしく、小さめながら聴感上は聴き劣りせず、Mix 的にも 1 段階良くなったような感覚でした。

改めて一人一人が最高の役割を果たしてバトンをつなぐ事の重要性を再認識できました。

なにより、本作品にお声かけいただいたディレクター近藤さんにはとても感謝しています。

数年前に一度だけお仕事をしたことがあったのですが、ひょんなことから偶然再会してその流れでこの曲の Mix をさせていただくことになりました。

そしてこの素晴らしい楽曲に出会い、栄誉ある賞までいただくことができまさに奇跡の連続です。

これを励みに今後もエンジニアリングに尽力し、より多くの素晴らしい瞬間に出会えるように勉強してまいります。

この度は本当にありがとうございました。

放送部門 「2ch ステレオ」 (写真は☆印の代表エンジニア)

[最優秀賞]

■作品 「東寺音舞台」 より 「What's My Name?」 MIYAVI 他

毎日放送 HDTV stereo 2023 年 11 月 12 日放送

☆ミキシングエンジニア：田中 聖二 (株式会社毎日放送)

<受賞のことば>

栄誉ある賞をいただき、エンジニアとして大きな喜びを感じています。

本作品の収録は、世界遺産・東寺という特別な場所で行われました。歴史的建造物での収録には音量制限があり、MIYAVI さんのギターを中心とした独自のサウンドをいかに表現するかが大きな課題でした。ドラムプレイヤーは通常のドラムセッ

トの代わりにカホン、小型のスネア、小型シンバル、ブラシを使用。またベース演奏者無しという編成でしたが、ギターとリズム隊の持ち味を引き出せるよう、丁寧な音作りを心がけました。

MIYAVI さんのギターは、ギター/ベース両アンプを通して作られた豊かな音色で、特に低域では、カホンとギターの低音を絶妙にバランスさせ、ベースレスでありながら厚みのあるサウンドを目指しました。また英語詞のヴォーカルは楽器の一部として捉え、グルーブ感を大切にミキシングを心がけ、バンドサウンド全体の一体感を追求しました。

東寺という場所ならではの空気感と、MIYAVI さんの音楽性との調和を大切にしまし



@discovery go 写真提供：MBSテレビ

た。様々な制約はありましたが、それらを活かした音作りを追求しました。結果として、伝統的な空間と現代音楽が溶け合う音響空間が作れたように思います。この経験は、エンジニアとして貴重な学びとなりました。

音楽はチームワークの産物であり、共に歩んでくださったすべての方々に心から感謝申し上げます。これからもより一層精進し、音楽の世界に貢献していけるよう、さらなる挑戦に挑んでいきたいと思っております。

この度は誠に有難うございました。

○収録エンジニア：石田 良馬（株式会社毎日放送）

○フロア・チーフ：東 光信（株式会社サウンドエースプロダクション）

[優秀賞]

●作品「ライブ・エール 2024」より「acacia [アカシア]」 松任谷由実

日本放送協会 HDTV stereo 2024年5月4日放送

☆ミキシング・エンジニア：垣内 章宏（日本放送協会）

<受賞のことば>

この度はこのような
名誉ある賞を頂き、
大変光栄に思います。

音楽で日本にエールを送る「ライブ・エール」という番組から、松任谷由実さんの acasia [アカシア]

を応募させていただきました。この楽曲は、松任谷さんが石川県河北郡内灘町に群生するアカシアの美しい花に感動して書かれたものだそうです。番組では、今と未来、形が変わってしまっても大切な想いは変わらない、そういった松任谷さんの能登への想いが語られています。

録音は、松任谷さんの歌とミュージシャンの方々の演奏のダイナミクスを丁寧に捉えるよう心がけました。多くの木をあしらったセットに光が差し込み、少し幻想的なイメージで創られた映像と、その中で歌う松任谷さんの歌声に意識がいくように、歌のエフェクトはあえてオケからほんの少しだけ浮かせるようなアプローチをとりました。松任谷さんの歌声を通じて、能登への想いが多くの視聴者の皆さまに届けられ、優しさのあるシーンに仕上げることができたと思っております。

「ライブ・エール」には他にもたくさん素晴らしい楽曲があり、番組音声チーフとして視聴者の皆さまに届ける役割を担うことができました。これからもいただいた賞を励みに精進し、出演者のパフォーマンスや想いをしっかり届けられるようなミキシング・エンジニアを目指したいと思っております。この度は誠にありがとうございました。

○セカンド・エンジニア：遠藤 美紀（日本放送協会）

○セカンド・エンジニア：高橋 義洋（株式会社ネオテック）



放送部門 「マルチ ch サラウンド」 (写真は☆印の代表エンジニア)

[最優秀賞]

■作品 「プレミアムシアター / 歌劇「ばらの騎士」より
「R. シュトラウス 歌劇「ばらの騎士」より第2幕」
歌：八木寿子 (オクタヴィアン)、石橋栄実 (ゾフィー)
演奏：京都市交響楽団 指揮：阪哲朗

日本放送協会 HDTV 5.0ch 2024年6月10日放送

☆ミキシング・エンジニア：萩原 路子 (日本放送協会)

<受賞のことば>

プロ音楽録音賞は、これまで尊敬する先輩方が受賞され、いつかは私もと目標にしておりましたので、今回受賞できたことを大変嬉しく光榮に思います。

歌劇「ばらの騎士」はドイツオペラの大作で、3月に行われた

わ湖ホールプロデュースによる公演を収録しました。上演時間は約3時間半。バンドによる演奏も多く、オペラ全幕の収録を初担当するには少し難易度が高く思いましたが、関係する皆様のご協力のもと無事に収録を終えることができました。

トラックダウンでは、オペラに造詣の深いプロデューサーの浅利洋氏と音作りの方向性を共有し、臨場感がありながらも R. シュトラウスのオーケストレーションの魅力を生かす鮮やかな音色を目指し、各場面で特徴となる楽器の印象付けや、歌の響きと言葉の明瞭度に留意しながらダウンミックスとの整合も取れるようミキシングしました。アシスタント・エンジニアの中野氏、岩井氏にも客席の咳等のノイズ除去にご尽力いただき、完成した音声データを納品できた時の達成感がとても大きかったことを覚えています。

最後に、ご指導頂いた先輩や同僚の皆様に感謝を申し上げますとともに、今後も研鑽を積み、番組を通じて視聴者の皆様に素晴らしい演奏を楽しんで頂けるよう励んでまいります。

○セカンド・エンジニア：植松 俊子 (日本放送協会)

○アシスタント・エンジニア：桐原 麻美 (日本放送協会)

[優秀賞]

●作品 「クラシック音楽館 / ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 来日公演」より
「ブラームス作曲 交響曲第4番 作品98」
キリル・ペトレンコ指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

日本放送協会 HDTV 5.0ch 2024年1月14日放送

☆ミキシング・エンジニア：島寄 砂生 (日本放送協会)

<受賞のことば>

この度は名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。



© 古都栄二(テス大阪)



本作品は2023年11月、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団と首席指揮者キリルペトレンコによる来日公演をサントリオールにて収録しました。NHKのオーケストラ収録では、ダイレクトミキシングで制作することが多いのですが、今回の収録素材はベルリン・フィルの会員制配信サービス、デジタル・コンサートホールにて配信されるということもあり、マルチトラック素材からミックスダウンし作成しました。ライブならではの雰囲気を保ちながら、各楽器のバランスを整えるように心がけました。キリル・ペトレンコ&ベルリン・フィルの奏でる重厚かつ力強いブラームスの響きを視聴者に届けられればと思っております。



このような機会を与えてくださった関係各所の方々に感謝申し上げます。

○セカンド・エンジニア：萩原 路子（日本放送協会）

ベストパフォーマー賞

■作品「BIGBAND SUPREME」より「シボネー」

発売元：株式会社ワーナーミュージック・ジャパン 96kHz/24bit 2ch

アーティスト：角田健一ビッグバンド



<受賞のことば>

今回、日本プロ音楽録音賞のベスト・パフォーマー賞を頂きました事はとても嬉しく、また大変誇りに思います。プロデューサーの内沼さんはじめ、関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

角田健一ビッグバンドは結成から34年を迎えましたが、時代の流れと共に、ビッグバンドの需要も減り、活動も大変ですが、「ビッグバンドよ永遠に！」をモットーに「スイングからラテンまで！」と題した公演を年に2回、東京の紀尾井ホールで続けております。

今回受賞した「シボネー」はキューバの作曲家のエルネスト・レクオーナが1929年発表したラテンの名曲で、アルバム「BIGBAND SUPREME」に収録されています。

このアルバムは全10曲で、「A列車で行こう」などスイングが8曲、それに「シボネー」他のラテンが2曲です。

ところで今回の「シボネー」の録音で心掛けた事ですが、マイナー調のテーマとメジャー調のサビが交互に出てくる事がこの曲の特徴だと思い、この特徴を最大限活かして表情豊かに演奏する事が大切と考えました。またコンガやラテンパーカッション、リズムセクションと管楽器セクションの絡みもスムーズに流れる事が大事と感じました。

大人数のビッグバンドは高音域のトランペット、高音域のサクソ、そして低音域のトロンボーンまで、全ての音域を網羅しています。どうぞ多くの方に大編成のビッグバンドサウンドの醍醐味を体感して頂ける事を願っています。

最後になりますが演奏をしてくれたメンバー、関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。



審査委員会

総合審査委員長 内沼 映二 副審査委員長 高田 英男、高橋 邦明
Best Master Sound 部門、Immersive 部門、アナログディスク部門（一部代表者により審査）

審査委員：内沼 映二、岡部 潔、奥原 秀明、川澄 伸一、
倉田 信雄、塩澤 利安、末永 信一、高田 英男、
高橋 邦明、角田 敦、内藤 哲也、三浦 瑞生、
吉田 保、脇田 貞二、渡部 昭人

放送部門 審査委員：深田 晃、阿部 健彦、五十嵐公彦、今村 公威、
亀川 徹、中島 博和、松永 英一

（以上 50 音順）

今回の顕彰内容については、各部門の最優秀作品と優秀作品の制作に携わったミキシング・エンジニア、マスタリング・エンジニア及びベストパフォーマー賞のアーティストに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈し、セカンド・エンジニア、アシスタント・エンジニアなど関わられたスタッフには表彰状を贈呈。

また、優秀作品の制作に大きく関わられたスタジオに「スタジオ賞」、アナログディスク部門の最優秀作品を Cutting したスタジオに「Cutting・スタジオ賞」として、優秀なスタッフと良好な環境の提供に対して顕彰、そしてこれからの活躍が更に期待出来るエンジニアに対し「ニュー・プロミネント賞」として表彰状とクリスタル製の表彰楯が授与された。



受賞者集合写真

第30回日本プロ音楽録音賞 審査委員講評

< Best Master Sound 部門 クラシック、ジャズ、フュージョン >

今年度の Best Master Sound 部門クラシック、ジャズ、フュージョンの応募作品数は 30 作品でした。
それでは講評させていただきます。

最優秀賞

ミキシング・エンジニア：日本コロムビア（株） 塩澤 利安様
「マーラー：交響曲第5番より第2楽章」
アンドレア・パッティストーニ 指揮
東京フィルハーモニー交響楽団



特定非営利活動法人
日本レコーディングエンジニア協会
理事長 吉田 保

収録場所 Bunkamura オーチャードホールライブ録音での録音は響きをよく再現しており、特に C.Bass Pizz. の響きがより自然に録音されておりホールの中で鑑賞しているかの如くのように思われる。この時代のマーラー、ブルックナーの作品は壮大なスケール感の作品が多く大編成のオーケストラであるその壮大さを大変よく表現している録音内容となっている。

多々な録音を行っている塩澤さんの技量、感性を表現しているように感じる。特に Woodwinds フレーズのつながり方が自然な音となって録音されており、或る程度のマルチマイクでの収録のバランスの大小が上手に録音されているのは、流石のバランス感覚、感性があるように思われる。Horn Brass セクションも壮大である。また、ティンパニが入るところは他の楽器にまわる音があるのでアンサンブルが崩れて聞こえがちになることが多々あるが、全体の音はこの場所に於いても整然と処理がなされている。ライブレコーディングため観客が入ると響きが激減するのであるが、ホールでの録音の難しさを克服しホールの響きを上手く録音出来ていることで最高のレコーディングとなっている。もう少し大きいホールでの録音であれば、より壮大な音が作れたかもしれないと思うと少々残念でならない。ともあれ最高のレコーディングである。塩澤さん最高！！

最優秀賞受賞おめでとうございます。

優秀賞

ミキシング・エンジニア：日本コロムビア（株） 今関 邦裕様
「FINAL FANTASY VII REBIRTH Original Soundtrack」より
「ギ・ナタタク」 鳥翔太郎 植松伸夫

まず、やや空間は狭く感じられるこの作品がスタジオ録音であることに非常に驚かされた。とかくスタジオ録音はやや硬く録音されがちではあるが、オーケストラの音色は素晴らしくバランスも最高に仕上がっている。これだけ沢山のトラックを整理してミキシングするのはご苦労があったに違いないが、これも見事に克服している。パーカッション、ジャングルドラムのエコー処理も遠近感が非常に出ており、ミキシングの高度処理が感じられる。プラスセクションもオーケストラの中で演奏しているかの如くに聞こえており、一体感があり最高のミキシングとなっていることが凄い。コーラスに至っては、オーケストラ後方に位置されているように聞こえているので、ホールでの録音の如く聞こえてくるこ

とに大変好感が持てる。シンセの処理も前面に聞こえるように処理なされており、音の配置もイマーシブオーディオ装置で聞いても効果が出ているように思われる。とにかくこれだけ多数のトラックを見事にミックスしていることに賞賛し、ここまでビクタースタジオを使いこなした今関さんに拍手を送りたい。今関さん最高！！

優秀賞受賞おめでとうございます。

< Best Master Sound 部門 ポップス、歌謡曲 >

僭越ではございますが、BestSound 部門（ポップス、歌謡曲）の講評をさせていただきます。

今回 BestSound 部門（ポップス、歌謡曲）は、36 の応募作品がありました。

1 次審査を経て最終審査において、最優秀賞、優秀賞が一作品ずつ選ばれました。

優秀賞

「Sunset Girl」 I Don' t Like Mondays.

発売元：AVEX MUSIC CREATIVE INC. 96kHz/24bit 2ch

ミキシング・エンジニア：安達 義規（株）ミキサーズラボ

マスタリング・エンジニア：山崎 翼 Flugel Mastering

アシスタント・エンジニア：吉見 潮音（株）ミキサーズラボ



(一社) 日本音楽スタジオ協会
常任理事 三浦 瑞生

まず楽曲を聴いてみると、気持ち良い 8 ビートの曲です。

イメージとして、車の窓を全開にして、海岸線をゆったり走っていく様な感じで、軽快さ、疾走感は有りつつも、肩肘張らず、ゆったりと走っていく感じのサウンドです。

ご本人の安達さんもコメントされていますが、何回も繰り返し聴ける様な、柔らかい音、サウンドを目指したとの事で、まさにそれを完成されていると思います。

主役である Vocal の輪郭はハッキリしていて、それに対しての各楽器の配置と音色、バランスが素晴らしいです。

全体に柔らかい音というと、ともすると、メリハリのない、分離の悪いサウンドに成りがちな事もありますが、この楽曲は、素晴らしい Mix とそれを更に引き上げるマスタリングで、しっかりとした疾走感を、Drums Bass ギターなどのリズム隊で出しつつも、スピーカーの外まで広がる Synth の音色などで優しく包むサウンドになっています。

とても素敵な楽曲とサウンドだと思いました。

優秀賞受賞、おめでとうございます。

最優秀賞

「Sweetest Tune」 Travis Japan

発売元：ユニバーサル ミュージック合同会社 44.1kHz/16bit 2ch

マスタリング・エンジニア：酒井 秀和（株）ソニー・ミュージックソリューションズ

ミキシング・エンジニア：松橋 秀幸（株）バーディハウス

アシスタント・エンジニア：大島 丈明（株）プラネット・キングダム

この楽曲も、アレンジの効果もあると思いますが、まず聴いてみると映像が浮かんでく

る様な楽曲です。

打ち込みの Kick と Bass は、今時の低域、最近では Lo 感と言うらしいですが、この Kick と Bass ラインでしっかりグルーブを出してこれに Vocal が乗っただけでも踊れる感じですね。

かなり低い帯域まで有りつつも、しっかりとした音程感があり、ダブついていません。よく見える Lo 感とでも言うのでしょうか。

また、楽器の配置、バランスが緻密で主役の Vocal とそれを支える Beat の合間に絶妙なバランスと音色で立体感のあるサウンドになる様に配置されています。

この立体感、奥行き感と言うのは、音圧を上げていくと、どうしても難しくなる部分もあるのですが、この楽曲は見事にその立体感奥行き感を実現しています。

また、奥行き感という事では、Vocal や一つ一つの楽曲の位置関係による奥行きは勿論ですが、その一つの楽器自体の厚みによる奥行きも感じられる楽曲だと感じました。

音像が潰れずに高い音圧も達成されています。やはり Mix の方向性を良く理解して、さらに同じベクトルで熟練の酒井さんの素晴らしいエッセンスを足されて完成された作品だと思いました。

最優秀賞受賞、おめでとうございます。

< Immersive 部門 >

第 30 回日本プロ音楽録音賞

Immersive 部門 応募数 20 作品

(Auro-3D 1 作品、サラウンド 5.1ch 3 作品、
360 Reality Audio 7 作品、Dolby Atmos 9 作品)

[講評]

Immersive 部門

最優秀賞 (プログラミング・サウンド)

「天球の音楽 ミュージック・オブ・ザ・スフィア・イマーシブ・クラシック」より

「メタモルフォシス 1～2 台のピアノのための～」

長谷川慶岳 (作曲) 後藤友香里 (ピアノ)

ミキシング・エンジニア：鈴木 浩二 (株) ソニー・ミュージックソリューションズ
アシスタント・レコーディング・エンジニア：房野 哲士

(株) ソニー・ミュージックソリューションズ

・プログラミング・サウンド受賞理由

音楽&サウンドはクラシックアコースティック・ピアノサウンドですが、音楽創りそのものの物が、完全にプログラミングされた音楽創作&音創りでありますので、プログラミング・サウンドでの選定と致しました。

・試聴感想

第一印象として、ピアノの音色感 (低音域～高音域までクリアーで深いサウンド) であり、ピアノシモ～フォルテシモの繊細な音表現によって、演奏者の思いがイマーシブサウンドによって更に広がって行く様な、新しいクラシック音楽が誕生したと感じました。



(一社) 日本音楽スタジオ協会
常任理事 高田 英男

・サウンド創り

ホール録音にて2台のピアノ演奏をクリアーな実音+離れた音空間を一緒に切り取り、音楽フレーズに併せて効果的に音場空間を創る手法は、本当に凄い発想であり、イマーシブサウンドならではの没入感、新たな音場表現、音楽的魅力を引き出す音源移動、など鈴木浩二さんの技術力の深さ・感性の凄さを改めて感じた作品です。

・制作ストーリー (ステレオサウンド誌 麻倉玲士氏インタビュー記事参照)

1. ピアニストで制作ディレクター中山ナミ子さんがエンジニア鈴木浩二さんから話を伺った360 Reality Audioで、イマーシブサウンドならではの新たなクラシック音楽創作をする事を提案。
2. ピアニスト(演奏者)の思いが伝わるイマーシブサウンド表現を目指す。
3. 作曲されたスコアに“あちこちで生命が生まれる”“高速回転”など、印象的な言葉を中山さんが書き込む。
4. エンジニア鈴木浩二さんがホール録音における2台のピアノ録音のマイキングとして、オンマイク+(上層、中層、下層)の基本マイキングをセットする。
5. 音源移動などの効果的なフレーズは別途ダビング録音などする。
6. 録音1日、ミックスまでの音源整理4~5ヶ月、ミックス1ヶ月。
7. イマーシブサウンドによる新たなクラシック音楽が誕生する。

◎演奏者・制作ディレクター・エンジニアががっちり組んで創られた新たなイマーシブサウンドによるクラシック音楽の創作での最優秀録音賞、本当におめでとう御座います。

最優秀賞 (アコースティック・サウンド)

スキマスイッチ「Anniversary EP」より

「ボクノート～ for 20th Anniversary with Orchestra から」 スキマスイッチ

ミキシング・エンジニア：甲斐 俊郎 (株) ARLT

セカンド・エンジニア：米山 雄大 (株) ソニー・ミュージックソリューションズ

50人編成のフルオーケストラ+バンド演奏の共演での作品です。

直感的な試聴感想として、大編成のイマーシブサウンドがとても心地良く伝わり、自然にオーケストラの音空間に入り込んだ感覚を覚えました。

YouTubeにて収録映像動画を視聴し、オーケストラの各楽器へのオンマイクですが、少し各楽器と距離を取ったマイキングで収録されており、各マイクの音の被りが自然な音色でオーケストラサウンドを表現されています。オーケストラの真ん中にイマーシブサウンド用のメインマイクが設置され、360 Reality Audioを意識したマイキングによる録音作品です。

又、バンドサウンドですが、この作品の音の肝になっている感じがし、力強く低音域が太いベースのグルーブ感&力強いドラムサウンドを核に、クリアーで繊細なピアノ、アコースティックギターの心地良い響きがオーケストラサウンドと融合された、素晴らしいサウンドです。

360 Reality Audio ミックスですが360 Reality Audioは全ての音源がオブジェクト音源ですので、そのまま貼り付けると音が「点」に感じて聴こえますので、「面音源」としての表現がポイントだと思います。メインの唄の音場創りでは前面のL&Rそして上下にも配置し、更に後方のサラウンドL&Rに貼付け、ヴォーカルが前面に貼り付いている感じをさせない音創りをしております。

更に、ストリングス定位ではファーストバイオリン～セカンドバイオリン～ビオラ～、チェロと音域順に斜め上から下にかけて配置し、コントラバスは更に下層に定位されてお

り、繊細なバイオリンの演奏～力強いコントラバスのサウンドなど、360 Reality Audioの三層（上層、中層、下層）の音空間を上手く活用されたサウンドと感じました。

[纏め]

応募された20作品を試聴して感じる事は、音楽制作そのものがイマーシブサウンドをイメージして創られた音楽が多く、その楽曲をエンジニアのノウハウで音楽の魅力を引き出すイマーシブを意識したマイキングにより、イマーシブサウンドの魅力がある音創りに進んでいると感じました。

今年度は打込み系ダンス音楽での作品は受賞されませんでした。是非とも打込みサウンドならではのイマーシブサウンドにも挑戦して頂ければと思います。

最後になりましたが受賞されました皆様、本当におめでとう御座いました！

<アナログディスク部門>

まずは、受賞された皆さま、誠におめでとうございます。

アナログディスク部門は今年度、33 1/3 回転盤が12作品、45回転盤が2作品の計14作品の応募がございました。カラーレコードの応募も1作品ございました。なお、昨今のアナログレコード・リリース状況を鑑み、新録音源のみならず、旧譜音源につきましても「リミックスされた作品、または新たにカッティングされた作品」も応募対象となっております。全14作品中、新録音源は9作品、旧譜音源は5作品でございました。応募作品は皆、アナログディスクの音質特徴を鑑み、丁寧な制作プロセスが感じられる作品が多く、その音質、音場感を非常に興味深く審査させて頂きました。



(一社) 日本音楽スタジオ協会
会長 高橋 邦明

さて、優秀作品のJOHN WILLIAMS/SAITO KINEN ORCHESTRA「JOHN WILLIAMS IN TOKYO」(発売元ドイツ・グラモフォン/ユニバーサルミュージック合同会社)よりC面2曲目の「THRONE ROOM & FINAL」(王座の間とエンドタイトル)ですが、ミキシング・エンジニアは株式会社 dream window の深田 晃さん、カッティング・エンジニアは東洋化成株式会社の手塚 和巳さんです。

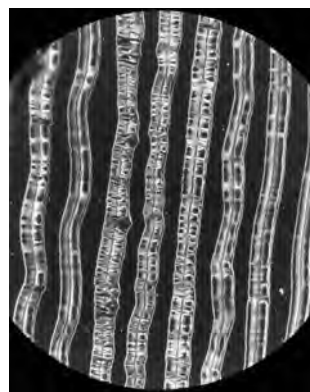
この作品はジョン・ウィリアムズさんが30年ぶりに来日して行ったコンサートのライブ収録となります。その音質ですが、艶やかな弦の音色、きらびやかで飛んでくるブラス、そして全体像を捉えるホールトーンが一体となり、広大な音場、緻密さと迫力が共存する絶妙なバランスの作品となっています。まさにアナログディスクで聴くには魅力満載のサウンドとなっております。カッティング・エンジニアの手塚さんは、そのような深田さんサウンドを忠実にラッカー盤の溝に刻み込んでいると感じました。フォルテッシモのダイナミックな箇所も破綻することなく、安心して音楽に没入してしまう素晴らしい高音質のアナログディスクサウンド作品だと思います。

そして、最優秀賞作品の角田健一ビッグバンド「ミキサーズラボ サウンド」シリーズ Vol.4 (発売元：株式会社ステレオサウンド)よりB面3曲目の「小さな花」ですが、カッティング・エンジニアが株式会社ミキサーズラボの北村勝敏さん、ミキシング・エンジニアが同じく株式会社ミキサーズラボの内沼映二さんです。お二方はアナログディスク部門2年連続の最優秀賞秀賞となります。

こちらの作品を審査したときには度肝を抜かれました。審査は作品名を伏せて行われますが、そのあまりに鮮烈なサウンドに審査後思わず、「この作品のタイトルを教えてください」と審査担当者に聞いてしまいました。艶やかで暖かく太いクラリネットと切れのいいブラス、そして全体を支える重心のある低音域とまさに自然なバランスの極致だと感じました。また、超高解像度、トランジェント感、音場感も素晴らしく大変感動致しました。

収録スタジオはビクタースタジオの301stとのことです。老舗の大スタジオであり、機材のメンテナンスも万全、ブラスサックス・セクションにはビンテージのノイマン真空管マイクを多数、一同に揃えて使用したとのことですが、さすがビクタースタジオさんならでのことだと思います。カットリングマスターにはハーフィンチ76cm/sのアナログテープが採用されました。しかし、先行ヘッドのあるハーフィンチのテープレコーダーがないため、カットリング用の先行音を生成するためにDAWを利用連携したとのこと、かなりご苦労されたのではと思います。内周寄りの3曲目でしたが、十分に線速度が確保できる溝位置でした。類まれなるカットリング技術で、より魅力的に音楽を刻み込んでゆく技術力、感性。今回もさすがは北村さんと感嘆せずにはいられませんでした。

そして、今年も応募された盤をお借りして、顕微鏡で溝を覗いてみましたので、ご覧ください。33 1/3回転盤ですので溝と溝の間は約1.8秒差があります。(今回、授賞式では顕微鏡動画もご覧いただきました。)一見、余裕があるように見えますが、振幅の大きさを鑑みますと、絶妙な溝幅、美しくもダイナミックな溝であります。また、ライナーノーツにはギリギリまで攻め込んでいる溝もありますので、こちらもぜひお手にとってご覧頂ければと思います。思わず音楽に没入してしまう素晴らしい高音質のアナログディスクサウンド作品です。



最後ですが、審査時のアピールポイントとしてこのような記述がありました。抜粋です。「詳細は明かせませんが、繊細かつ鋭い高音域、艶やかな中音域、太くどっしりした低音域が再現できたと自負しております。」まさにその通りだと思います。北村さん、あとでこっそりと詳細を明かして欲しいなと思っております。

私の方からはこちらでアナログディスク部門の講評とさせていただきます。あらためまして受賞された皆さま、まことにおめでとうございます。

<ニュー・プロミネント賞>

今年も、ニュー・プロミネント賞は、2名の若いエンジニアを選定させて頂きました。

まず、Best Master Sound部門クラシック・JAZZに応募して頂いた、日本コロムビア久志本 恵里さんの作品です。

このニュー・プロミネント賞は、年齢が関わる賞ではありますが、ここでは触れないでおきます。久志本さんはとてもお若いです。

さて、作品ですが、上村誠一さんのカウンター・テナーと、ピアノのシンプルな構成です。

私も経験があるのですが、カウンター・テナーの録音は非常に難しく、ダイナミック・レンジが広く、声を張ったところは歪っぽくなりがちですが、マイクロフォンの選択や、HAのレ



(一社) 日本音楽スタジオ協会
名誉会長 内沼 映二

ベル設定、そして、圧縮感を感じないコンプレッサーの使い方がとても上手いと思いました。

その結果、歪感のない、透明感があるボーカル・サウンドになっています。

そしてピアノですが、ホールの空気感が漂う高品位な空間を演出しています。そして、音質に誇張感がなく、ナチュラルな音質であることで、ボーカルの邪魔をしない、しかも重厚な響きがある創りは素晴らしいと思います。

これからの活躍を楽しみにしています。

過去のプロ録受賞者を調べてみましたら、女性としてミキシング・エンジニアとしては初めての受賞者になります。大変な快挙だと思います。

そしてもう1名は、Best Master Sound 部門 ポップス、歌謡曲部門に応募された、ミキサーラボ 田宮 空さんの作品です。

田宮さんは、現在スケジュールがなかなか取れない売れっ子エンジニアになっています。この要因を探ってみますと、全てに於いてバランス感覚がとても良い事です。楽器バランスは勿論の事、高域/中域/低域の帯域バランスが良い事。そして、クライアントやスタッフとのコミュニケーション・バランスがとれる事も大事な要素と思います。

この楽曲もしかり、安定した低域のボトムの上に、各パートの E.Gt を積み重ね、最終的には音のピラミットを形成する事で、安定感があるサウンドになっています。

この楽曲は、打ち込みのリズム系以外は、すべて E.Gt で構成されて、コード系、フレーズ系、エフェクト系など、かなり数多くのパートがある E.Gt サウンドです。

E.Gt は楽器の特性上中音域に集中してしまうのですが、巧みな EQ 操作とパンニングで各パートが見え易い創りになっています。

そして、間奏ソロのディストーション Gtr は音質によっては耳に刺激を与え、ボリュームを下げたくなるストレスを感じるのですが、聴きやすい音色になっています。

この事を田宮さんに聞きましたら、

『「サーマル」という、歪系のソフト・マルチ・エフェクターの中のコーラス、ビッドクラッシュなどを、ドライのギターにかけた後にギターアンプを通す。』という事でした。

そして、この曲の要であるボーカルは、デッドでありながらウエット感があり、恐らく、高調波帯域（倍音）を上手く引き出して、説得力のある、魅力的なボーカル・サウンドになっています。サビからは、ボーカルの空間を広げる事により、新たな展開によって、この作品をより魅力的にしています。

実はこの作品ですが、あまり公表してはいけないのですが、一次審査では、Best Master Sound 部門（ポップス、歌謡曲）のトップ・クラスに入る高得点、ただし本審査では一寸届きませんでした。来年もお待ちしています。

益々の活躍を楽しみにしています。

<ベストパフォーマー賞>

MPN 倉田でございます。

実際に受賞作品の演奏を皆さんにお聴きいただいたので、今更講評するまでもないかなと言う気もするのですが、ちょっと一言だけ。

この式の冒頭の方で特別功労賞を頂戴いたしました MPN 会長である椎名の後を引き継ぎまして、先程登壇しました MPN 副理事長の角田と私 2 人で、このプロ音楽録音賞のベストパフォーマー賞を選定すると言う初めての経験となりました。しかもそのすべての部門の曲を聴かせていただくということで、最初はどのような風に審査して行ったら良いか分からない状態だったのですが、審査の作業を進めて行くと 2 人で擦り合わせをした訳でもなく、最終的にこちら辺ではないだろうかと言う 3 作品程が 2 人とも共通していて、その中からこれだと決めさせていただきました。ちなみに、一つはボーカル作品、もう一つはピアノのソロ作品で、そしてもう一つが角田健一さんのビッグバンドだったわけです。

これは後付けの様な話となりますが、これだけ世界中に不安なり不満なり、そう言ったものが渦巻いている中で、音楽が人々に与えられるものっていうのでしょうか、その事に日常的に音楽の現場に携わっている我々は気が付かないでいるというか、むしろ忘れている時があるのではないかと、今回色々な作品を聴きながら思いました。ですからリスナーの耳、心で聴くように心掛けたのですが、皆さんが音楽に求めるものというのは、癒しであったり、何かワクワク感であったり、ある時はもう何か背中を押してくれる力であったり、そう言うことなんだろうなと。たまたまではありますが、3つの作品を2人が共通で選べたと言うことが、自分達にとってもこれで良かったのかなと思っております。

それから個人的な話になって恐縮ですが、もう 50 年近く前にヤマハのネム音楽院と言う学校に通っておりまして、そこにはビッグバンドの時間がありました。しかしながら生徒だけでは数が足りないので、講師の方々も当然参加するのですが、それでも人数が足りなくて、先輩に当たるミュージシャンの皆さんがアンサンブルスタッフとして駆け付けてくださるんです。実はその中に角田健一さんがいらっしゃったのですよね。そして今回、このような形で、こちらが表彰すると言うのは非常に恐縮なんです、それが個人的に大変光栄なことで、嬉しいことだと思っております。

角田健一さん、本当におめでとうございます。



(一社) MPN
理事長 倉田 信雄

<放送部門 2ch ステレオ / マルチ ch サラウンド>

第30回日本プロ音楽録音賞、受賞された方々、おめでとうございます。

放送部門の講評を行います。

今年度は2ch ステレオの応募作品が17作品

マルチチャンネルサラウンド作品が6作品の応募でした。

それではまず、2ch ステレオ作品の講評を行います。

○優秀賞

垣内 章宏／日本放送協会

放送番組名：「ライブ・エール 2024」

応募曲名：acacia [アカシア]

アーティスト名：松任谷由実



(一社) 日本音楽スタジオ協会 理事
(株) dream window
代表 深田 晃

この作品は安心して聞くことができる誇張されたとおろのないバランスの良い音楽作品になっていました。

帯域感や広がりもよくアレンジが生きるサウンドになっていました。

全体の質感は映像にマッチしたもので視聴者に音楽・映像作品として、アーティストの意図する音楽イメージが十分伝わるミキシングになっており評価されました。

審査員の意見の中にはVoがもう少し明るく生き生きとしていれば、なお良いのではなかという意見もありました。

しかし全体としてはとてもバランスの良い作品になっていました。

こういった安定したバランス感はなかなか生み出すことは難しいと思います。

日頃から多くの音楽を聴きバランス感が体に入っているからこそ作り得る世界だと思いました。今後もこのような良い作品が生まれてくることを期待します。

○最優秀賞

田中 聖二／株式会社毎日放送

放送番組名：「東寺音舞台」

応募曲名：What's My Name?

アーティスト名：MIYAVI 他 です。

東寺音舞台、これは毎日放送が毎年収録しているコンサートですね。

今回の楽曲は楽曲の支えとなる Kick や Bass という音楽の支えのない中でしっかりとした低音感を構築し、バランスの良いバンドサウンドに仕上げた点が非常に評価されました。カホンの低音、そして Bass の音を補うためにベースアンプにギターの声も送るという工夫も見られました。

MIYAVI さんの楽曲を活かすため、こういった工夫で低域を安定したサウンドでミキシングできたことが評価されたポイントだと思います。

MIYAVI さんのギターのうちまかさやかっこよさは十分表現されていますが、逆に東寺という場所で演奏している感じが番組としてももう少しであればより良いように思いました。

音楽番組はそこで演奏されている音楽を視聴者のみなさんがその世界観を共有できて初めて感動できるものだと思います。

MIYAVI さんとバンドのみなさんの生み出した音を熱い熱量をもったライブとして表

現でできていることを嬉しく思います、きっと視聴者にもエネルギーが伝わっていると思います。

それでは次に マルチチャンネルサラウンド 作品の講評を行います。

○優秀賞

島寄 砂生／日本放送協会

放送番組名：「クラシック音楽館 / ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 来日公演」

応募曲名：ブラームス作曲 交響曲第4番 作品98

アーティスト名：キリル・ペトレンコ指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

クラシック音楽館のベルリン・フィルハーモニー来日公演、サントリーホールでの演奏会収録です。ベテランの島寄さんらしい、破綻のない落ち着いた作品になっています。

サラウンド感も自然で意図的でないところが心地よさにつながっていると感じました。

この来日コンサート、別の公演日ですが、同じサントリーホールで聞きました。

その時の印象と比べると、音が少し落ちつきすぎで多少暗めであるような印象を持ちました。もう少しベルリンフィルらしいキレの良い、明るいサウンドだとより印象深くなるのではないかと感じました。

とはいえ応募作品の中では極めて安定しているサウンドで安心して聞ける作品でした。今後も若手の指導をよろしくお願いします。

○最優秀賞

萩原 路子／日本放送協会

放送番組名：「プレミアムシアター / 歌劇「ばらの騎士」

応募曲名：R. シュトラウス 歌劇「ばらの騎士」より第2幕

アーティスト名：歌：八木寿子（オクタヴィアン）、石橋栄実（ゾフィー）

演奏：京都市交響楽団 指揮：阪哲朗

歌劇「ばらの騎士」の2幕ですが、オーケストラは明るくバランスよくミキシングされています。サラウンド感は少し多いように感じましたが、「ばらの騎士」の場面を的確にとらえたミキシングになっており、音色感も良く評価されました。

オペラはメインマイクを用いることができないため、多くのマイクをミックスして音楽バランスを構築する必要がありますが、破綻なく気持ちの良いミックスになっていました。

一点気になったのが歌の定位で、ほぼハードセンターになっているのですが、これはワイヤレスマイクを使用してそのように定位したのかどうか資料がないのでわかりません。応募のシーンが歌手の移動の少ないところだったので他の場所はどのような定位になっていたのか聞いてみたいところです。

いずれにしても応募作品の中ではサウンドはクリアでバランスが良くミキシングされており作品の世界観がわかりやすく、評価されました。

今後も良い作品を生み出していただければと思います。

それでは放送部門の全体講評を行います。

昨年は大規模な作品の応募が多かったと思いますが、今年はコンパクトでも工夫の多い番組や小編成で質の高い音楽番組が多かったように思います。

マルチチャンネルサラウンド作品はほぼクラシックの演奏会の作品でスタジオ等の作品

がありませんでした。制作する手間やコスト面などスタジオ番組ではサラウンド制作が難しくなっている傾向にあるのかなとも感じました。

また、クラシック作品は簡単なようでバランスがとても難しいです。

応募作品の中にもハープが大きすぎたり、Celloが他の楽器に比べてバランスが大きいなど不自然なものがありました。また、響のバランスが大きすぎるのも見受けられました。

多くの音楽作品を聞き、コンサートで生の音を体験する機会をより多くしてバランス感覚を身につけてもらえればそれが良い作品制作に繋がるだろうと思いました。

また、応募作品のアピールポイント等資料を多く貼り付けてあり、情報の多すぎるもの、資料がなくレコーディング時の状況や感想がわからないもの等など資料に関する情報の伝え方に疑問を持つものもありました。

応募に際してはこの点も気をつけていただければと思います。

今後とも業界の発展に寄与していただければと思います。

改めて受賞されたみなさま、おめでとうございます。

「音の日2024」



2024年12月6日（金）に（一社）日本オーディオ協会主催のイベント『音の日2024』が開催されました。

今回の「日本プロ音楽録音賞授賞式」もその一環として開催され、「学生の制作する音楽録音作品コンテスト表彰式 ReC♪ST（レックスタ）」と連携して一緒に会場にて執り行われました。

当日の式典は下記の通り進行いたしました。

1. 学生の制作する音楽録音作品コンテスト ReC♪ST 表彰式
2. 日本プロ音楽録音賞授賞式
3. 音の匠 顕彰式
4. 懇親会

式典は第10回を迎える「学生の制作する音楽録音作品コンテスト ReC♪ST 表彰式」から始まり、最優秀賞、優秀企画賞、優秀録音技術賞、奨励賞を受賞された方の表彰、作品の再生が行われました。そして今回は、コロナ禍で開催が叶わなかった第7回表彰式を執り行い、会場に来られた当時の受賞者2名の表彰、作品の再生が行われました。

続いて、学生録音コンテスト ReC♪ST の受賞者など学生も残る同じ会場で第30回日本プロ音楽録音賞授賞式が行われ、受賞作品の紹介および表彰がされました。

次に「音の匠顕彰式」が行われ、選定された「鹿島建設 OPSODIS 立体音響プロジェクトチーム」を代表して村松 繁紀氏に表彰状とトロフィーの授与がされ、特別講演が行われました。

そして、最後に同会場にて懇親会が開催され、「音の日2024」は滞りなく終了いたしました。



学生の制作する音楽録音作品
コンテスト ReC♪ST 表彰式



日本プロ音楽録音賞授賞式



音の匠顕彰式



「音の日2024」懇親会



懇親会で展示デモがされた音の匠受賞の「OPSODIS」(上)と東京電機大学オーディオ技術研究部学生による自作スピーカー(下)

会 員 動 向

1. 会員数（令和7年1月1日現在）

正会員（法人）	20 法人	準会員	2 法人
正会員（個人）	14 人		
賛助会員Ⅰ	42 法人	賛助会員Ⅱ	2 法人

2. 入会

①法人正会員

ユニバーサル ミュージック合同会社 7月1日付

②個人正会員

佐藤 尚 10月1日付

戸田 清章 1月1日付

3. 退会

①法人正会員

株式会社アバコスタジオ 6月30日付

4. 法人・会員代表者および住所変更、その他

①賛助会員Ⅰ

○法人代表者変更

専門学校東京ビジュアルアーツ・アカデミー

(旧) 清水 禎徳

(新) 稲實 洋祐

○会員代表者変更

日本環境アメニティ株式会社

(旧) 杉崎 眞一

(新) 石上 宗太郎

②賛助会員Ⅱ

○会員代表者変更

株式会社ステレオサウンド

(旧) 鈴木 敏明

(新) 高見沢 和美

5. その他

○課名・課長・担当者変更

経済産業省 商務情報政策局

(旧) 商務情報政策局 コンテンツ産業課

(新) 商務・サービスグループ 文化創造産業課

(旧) 渡邊 佳奈子 (課長)

(新) 佐伯 徳彦 (課長)

(旧) 木村 結季 (係長)

(新) 阿部 沙響 (係長)

○理事長変更

一般社団法人MPN

(旧) 椎名 和夫 (会長就任)

(新) 倉田 信雄

○会長変更

一般社団法人日本映画テレビ技術協会

(旧) 毛塚 善文

(新) 小島 敏裕

○会長変更

日本映画テレビ照明協会

協同組合 日本映画・テレビ照明協会

(旧) 望月 英樹

(新) 長田 達也

サービス産業動態統計調査ご協力をお願い

サービス産業動態統計調査は、我が国におけるサービス産業の事業活動の動態を明らかにする統計（統計法に基づく基幹統計「サービス産業動態統計」）を作成することを目的に令和7年1月から毎月実施する調査です。政府の重要な調査であり、統計法（平成19年法律第53号）に基づいた報告義務のある調査（基幹統計調査）として実施します。

詳しくは、以下の URL から「サービス産業動態統計調査ホームページ」をご覧ください。

「サービス産業動態統計調査ホームページ」

<https://www.stat.go.jp/data/mbss/index.html>



サービス産業動態統計調査が始まります

サービス産業 動態統計調査

政府統計

「サービス産業動態統計調査」は、我が国におけるサービス産業の事業活動の動態を明らかにするため、統計法（平成19年法律第53号）に基づく基幹統計調査として令和7年1月より新たに実施します。

- ✓ インターネット回答をお願いします。
- ✓ 令和7年（2025年）1月から毎月実施します。

♪ 編 集 後 記 ♪

新年あけましておめでとうございます。2025年は第二次世界大戦・太平洋戦争終結から80年だそうです。戦後80年、焼け野原からの復興、団塊の世代中心に死に物狂いで皆働いて、高度経済成長を成し遂げたんでしょうね。現在の働き方改革は、何か間違えているのでは？と感じています。

Ryu1.N

明けましておめでとうございます。異常気象などと言われておりますが、小さな変化の積み重ねが今を作り上げています。如何に変化を感じ取って対応して行くか、これが大切なんだと思う今日この頃です。

Pesonai

明けましておめでとうございます。昨年9月に事務局を移転し、通勤経路が変わりました。帰り道は気になる所に寄ってみたり。本年も宜しくお願い申し上げます。

mm

***** 総 務 委 員 会 *****

委員長 中村 隆一 (ミキサーズラボ)

委員 内藤 重利 (事務局)

” 伊東 真奈美 (”)

【発行人】 会長 高橋 邦明 【発行】 2025年(令和7年)1月

【発行所】 一般社団法人 日本音楽スタジオ協会

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 565-10 ビルデンスナイキ 302

TEL. 03-3200-3650 FAX. 03-3200-3660

<https://www.japrs.or.jp> E-mail:japrs@japrs.or.jp

【編集】 総務委員会

【印刷所】 株式会社研恒社



JAPRS

Japan Association of Professional Recording Studios

<https://www.japrs.or.jp> E-mail: japrs@japrs.or.jp